

# 英語の非対格動詞の第一・第二言語習得

千葉修司  
津田塾大学

## 0. はじめに

文法の習得のなかで、動詞の持つ意味構造および項構造に関する言語知識の習得は特に重要な位置を占めている。各動詞の持つ意味構造および項構造の違いについての正しい知識を身につけることにより、子供および学習者は、それぞれの動詞を具体的文の中で正しく用いることができるようになる。意味構造および項構造の違いに基づいてなされる大まかな動詞の分類の中に、自動詞対他動詞の区分があるが、最近の文法研究では、このうち自動詞をさらに非対格動詞（あるいは能格動詞）および非能格動詞（あるいは「純粋な」自動詞）に分類するのが普通である。この小論では、非対格動詞と非能格動詞の違いに関する最近の文法研究および言語習得研究を概観し、これらの研究をもとに、特に日本人の英語学習者に見られる非対格動詞の習得過程の特徴について考えてみたい。<sup>\*</sup>

## 1. 生成文法研究と言語習得理論

生成文法の特徴の一つは、その研究目標の中に、言語習得のメカニズムを解明するという一大目標が同時に組み込まれているという点である。この特徴は、かなり早い時期からチョムスキーによる生成文法（理論）のアイディアの中に見られるものである。たとえば Chomsky (1966: 20)は、生成文法理論に基づく言語習得の大まかな仕組みのモデルとして、(1)のような図式を提示している。

(1) primary linguistic data      AD      G

この図式は、ある一定の第一次言語資料(primary linguistic data)が入力として与えられると、生得的に人間に備わっている言語習得装置(language-acquisition device, AD)が作用し、その結果として記述的に妥当な文法 G が出力として得られるということを示している。このような働きを持った AD の中身を解明することが、とりもなおさず言語習得のメカニズムの中心的部分を説明することになる。ちなみに、言語習得「装置」という呼び名は、その装置の中身（すなわち、人間に生得的に備わった言語習得能力）を明確にしないまま、それをハードウェア的にとらえたときの比喩的表現である。生成文法の理論的研究の中では、そのような言語習得能力の解明は、「説明的妥当性(explanatory adequacy)」の条件を満たす言語理論の構築の作業としてとらえられている。この、説明的妥当性を満たす言語理論の構築という研究目標は、しかしながら、その後長い間、達成困難な目標のまま残されていた。

ところが、1970年代後半から1980年代の初めに掛けて、「一般的原理とパラメータによるモジュール的理論」いわゆる「統率・束縛理論(Government and Binding theory, GB theory)」が登場するに及んで、この研究目標の達成可能性が現実性を帯びてくるようになった。GB理論では、上図(1)におけるADの中身は、自然言語すべてに関わ

るいくつかの一般的原理からなる普遍文法 (Universal Grammar, UG) であると考えられている。さらに、それぞれの一般的原理には、個別言語の持つ個別的特徴に対応するような可変部がパラメータとして含まれているが、それぞれのパラメータの値は入力の内容に応じて決まり、そのようなパラメータ値の集積が個別言語の文法の中核部を形成すると考えられている (Chomsky (1981))。これが第一言語 (母語) 習得のメカニズムの大まかな内容である。

一方、第二言語習得のメカニズムの研究に関して問題となるのは、特に、UG が第一言語習得の場合と同じように働くのかどうか、および、すでに習得されている第一言語の文法が第二言語習得の場合にどのような影響を与えるのか、ということである。

この小論では、非対格動詞についての言語習得の特徴について考察するのが主なねらいであるが、非対格動詞の習得の問題を UG の観点からとらえようとした場合、はっきりしない点があることに気がつく。すなわち、GB 理論において提案されている一般的原理 (たとえば、境界理論 (bounding theory)、統率理論 (government theory)、理論 (-theory)、格理論 (Case theory) など) の中のどの原理が非対格動詞の習得と直接関わるのかということがそれほど明確ではないということである。ただし、非対格動詞の習得において重要な働きをすると考えられる「連結の形成 (Linking formation)」あるいは「連鎖形成 (Chain formation)」を UG の中の一般的原理のひとつであると考えることができれば、<sup>1</sup> 非対格動詞の習得の場合にそのような原理がどのように関わるかを考察することにより、非対格動詞の習得の研究が UG の研究のひとつとして位置付けられることになるであろう。

## 2. 非対格仮説

非対格動詞の習得の特徴について考察する前に、非対格動詞の特徴について簡単にまとめておこう。自動詞は他動詞と異なり目的語を取らないというのが、自動詞と他動詞を区別する重要な違いであると従来考えられていた。<sup>2</sup> ところが、普通、自動詞として分類される動詞の中にも、少なくとも D 構造のレベルでは、目的語を従えていると考えられる動詞 (すなわち、非対格動詞<sup>3</sup> あるいは能格動詞<sup>4</sup>) が存在するとする仮説、すなわち、非対格仮説 (Unaccusative Hypothesis) と呼ばれる仮説が提案されるようになった (Perlmutter (1978), Rosen (1981, 1988), Burzio (1986))。それ以来、非対格動詞についての研究が、文法研究の新しいテーマのひとつとして多くの言語学者の注目を集めるところとなっている (cf. Rosen (1984), Keyser and Roeper (1984), Hale and Keyser (1986, 1987), Levin and Rappaport (1989), Levin and Rappaport Hovav (1995))。

ここで、Perlmutter (1978: 162-163) の分類に従って、非対格動詞の例を (2) にまとめておこう。

- (2) a. D 構造における目的語が意味的に被動者 (Patient) を表す：  
*burn, darken, die, drop, fall, float, freeze, melt, scatter, sink, etc.*
- b. 存在や出来事を表す：  
*arise, disappear, ensure, exist, happen, occur, result, show up, take place, turn up, vanish, etc.*
- c. 光、騒音、臭いなど、非意図的な放出を表す：

*clang, crackle, glitter, glow, pop, shine, smell, snap, sparkle, stink,*  
etc.

- d. 始まり、終わり、継続など、相 (アスペクト(Aspect)) を表す :  
*begin, cease, continue, end, start, stop, etc.*
- e. 継続状態を表す :  
*last, remain, stay, survive, etc.*

一方、非対格動詞に対して、D 構造および S 構造のいずれのレベルから見ても「純然たる」自動詞<sup>5</sup>としての特徴を備えている動詞、すなわち非能格動詞の例としては、次のようなものがある (同じく Perlmutter (1978: 162)より)。

- (3) a. 自発的、意図的動作・行為を表す :  
*bark, cry, dance, fight, frown, grin, growl, laugh, play, ski, speak, smile, swim, talk, think, walk, weep, whisper, work, etc.*
- b. 非意図的な生理的現象を表す :  
*belch, burp, cough, defecate, hiccough, sleep, sneeze, urinate, vomit, weep, etc.*

非対格仮説は、最初、関係文法の枠の中で提案された。その基本的主張を従来の文法用語を用いて表すと、「基底構造において、目的語は持つが主語を持たないような自動詞 [ すなわち、非対格動詞 ] が存在する」(Perlmutter (1978: 160))ということになる。この仮説を取り入れて非対格構文の生成を考えると、さらに、非対格動詞の目的語は S 構造においては主語として機能するという主張に結び付くことになる。このことから、非対格仮説は、英語のような言語の場合、「名詞句移動の適用により下記(4a)のような D 構造から(4b)のような S 構造へと至る派生過程をたどるような自動詞が存在する」という内容の仮説として通常理解されている。<sup>6</sup>

- (4) a. [ <sub>NP</sub> e ] V NP
- b. NP<sub>i</sub> V [ <sub>NP</sub> t<sub>i</sub> ]

これを Williams (1981) のいう「内項 (internal argument)」および「外項 (external argument)」の概念を用いて述べ直すと、次のようになる。すなわち、非対格動詞は、内項だけをもち外項を欠くので、D 構造において目的語の位置を占める内項が S 構造において主語の位置に配置される、いわゆる外項化 (externalization) の変化を受けることになる。(4a)から(4b)へと至る変化は、英語の場合義務的となる。これは、ひとつには、拡大投射原理 (extended projection principle, EPP) (Chomsky (1986: 4)) により、(4a) のような主語の欠けた構造が英語では (表層の文としては) 普通許されないためである (Pinker (1987: 47-48))。もうひとつの理由は、非対格動詞の特徴として、目的語に格を付与できない (Fiengo (1980: 57), Chomsky (1981: 125), Borer and Wexler (1987: 158)) ので、(4a) のような構造のままでは、目的語の名詞句に格が付与されず、<sup>7</sup> その結果、格フィルター (Case Filter) (cf. Chomsky (1981)) 違反を引き起こすからであると考えられる。

名詞句移動を伴う英語の非対格構文の S 構造の特徴は、別の観点からすると、(4b) に見るように A 連鎖 (この場合は、(NP<sub>i</sub>, t<sub>i</sub>)) を形成することであるということが出来る。このような A 連鎖を形成する別の構造としてすぐに思い浮かぶのは、下記(5a) のような受け身文の場合であろう。すなわち、(5a) の S 構造は(5b) のようになる。

- (5) a. The dog was bitten by the cat.  
 b. [<sub>NP</sub> The dog ]<sub>i</sub> was bitten [<sub>NP</sub> t ]<sub>i</sub> by the cat.

受け身文の場合も、その動詞の性質上、目的語の名詞句に格が付与できず（すなわち、他動詞に本来備わっている対格付与の特性（および外項に付与される主題役割の特性）が、受け身の形態素 *-en* に付与される、あるいは、その *-en* により吸収される結果、目的語の名詞句に格が付与できず（Chomsky (1981: 124)）、そのため名詞句移動が義務的となる。

ただし、同じような名詞句移動が含まれているとはいえ、非対格構文の場合と受け身文の場合とは、次の点で大きく異なっている。すなわち、受け身文の場合は、動詞の持つ形態的特徴 (*be + V-en*) により、それが受け身文であることが S 構造から容易に判別できるのに対し、非対格構文の場合は、その動詞が形態的に特別な姿をしているわけではない (Rutherford (1998: 182))。ただし、他動詞との違いが統語構造の違いとして S 構造上合図されているとはいうものの、さらにそれが自動詞の中の、特に非対格動詞のグループに属する動詞であるということを S 構造より判別するためには、上記(2a-e)のような、動詞の意味的特徴によらなければならない。(動詞の意味的特徴をもとに非対格動詞と非能格動詞の分類を試みたものとして、Perlmutter (1978)のほかに、特に動きを表す動詞(verbs of motion)を分類したものとして Levin and Rappaport (1989)がある。また、非対格動詞・非能格動詞の持つ意味的特徴の違いを「外的原因(external cause)」および「内的原因(internal cause)」などの一般的意味概念を用いて説明しようとするものとして Levin and Rappaport Hovav (1995)がある。<sup>8)</sup>

ところで、上ですでに述べたように、非対格構文の場合、名詞句移動が義務的に適用される理由には、(望ましくない)余剰性が見られる。一方、受け身文の場合には、余剰性があるかないかについて、非対格構文の場合とは異なる結論が導かれる可能性がある。すなわち、(6a)のような受け身構文の場合、(6b)のように、たとえ主語の位置が、たとえば、虚辞(expletive)の *there* で埋められていて、したがって、拡大投射原理は満たされているので、その点では、目的語を主語の位置に移動させる必要がないと思われるような文が、依然として非文となるという事実がある。つまり、このような文は、目的語が移動されていないので、格フィルター違反のために非文となる (cf. Roberts (1997: 70-71))。一方、(7a)のような非対格構文の場合は、目的語を移動させなくても、(7b)のように、主語の位置に *there* を配置してできる *there* 構文が一般的に可能となる。<sup>9)</sup>

- (6)a. *e* was beaten up the students (by the police)  
 b. \*There were beaten up the students (by the police).  
 (7)a. *e* arrived many guests  
 b. There arrived many guests.

このことにより、受け身構文の場合は、格フィルターと拡大投射原理との余剰性はない（すなわち、(6a)のような構文がこのままでは許されないのは、格フィルター違反となるような名詞句 *the students* が存在するためである）と考えてよいが、非対格構文の場合は、この余剰性は依然として残ることになる。しかし、ここでは便宜上、非対格構文の場合も、受け身構文の場合と同じように格フィルターの理由によ

り名詞句移動が義務的になると考えておこう。

このように、共通点もあれば、また一方では異なる点もある受け身文と非対格構文であるが、言語習得の観点から見た場合、この二つの構文はどのような特徴を示すであろうか。以下の節ではこのことについて少し考察してみよう。

### 3. 受け身文の第一言語習得

受け身文を正しく用いたり、正しく理解したりするのに必要な文法的知識の中心的部分は、A連鎖についての知識である。A連鎖についての知識がUGに含まれる普遍的な一般的言語知識の一部を成すとするならば、次に問題となるのは、それが生得的知識の一部として、発達段階の早い時期から機能するのか、それとも、ある程度発達段階が進んだある段階以降になって初めて機能するようになるのか、という問題である。このような問題は、単に受け身の習得の場合に限ったことではなく、UGの中に含まれていると考えられる様々な言語知識全体に一般的にあてはまる問題である。つまり、生得的に身に付いていると考えられる言語知識の中にも、ちょうど生物学で言う二次性徴の現れの場合と同じように、生まれて何年かたった段階で初めて、もともと生得的に脳細胞の中に組み込まれていた知識が活動を始めるような場合があり得るということになる。このような考えを「成熟性仮説(Maturation(al) Hypothesis)」あるいは「不連続性仮説(Discontinuity Hypothesis)」と呼ぶ。一方、すべての文法的原理が、生まれたときからすでに子供にとって利用可能の状態になっていて、成熟による変化は見られないとする立場を「連続性仮説(Continuity Hypothesis)」と呼ぶ(Pinker (1984: 7))。<sup>10</sup>

受け身文、特に動詞的受け身文、の第一言語習得について比較的是っきりしていることは、その習得が能動態の場合と比べて一般的に遅くなるということである(de Villiers and de Villiers (1978: 80, 200; 1979: 76ff.), O'Grady (1997: ch. 10))。ただし、(動詞的)受け身文の習得がどのくらいの年齢において可能となるかという問題については、4、5歳程度あるいは6、7歳以降にならないと十分な習得が可能にならないとする意見がある一方、すでに3歳程度で十分な習得が可能であるとみなす研究者もいる。

なお、下記(8)の例に示すような、A連鎖を含まない形容詞的受動態(adjectival passive)については、A連鎖を含む受動態の文よりも、幼児の理解度が一般的に高くなることが知られている(cf. Grodzinsky (1995)<sup>11</sup>)。

- (8) a. The boy was interested in the girl.  
b. The woman was uninspired by the man.

このような形容詞的受動態の場合は、失文法の患者もかなり正確に判断できるようである(cf. Grodzinsky (1995: 36, fn. 4))。

A連鎖を含む受動文の習得は一般的に遅れるという見解に立つ研究者の例としては、Borer and Wexler (1987)を挙げることができる。Borer and Wexler (1987)は、英語およびヘブライ語の受け身文の第一言語習得に関するデータをもとに、下記(9a)に見られるような形容詞的受け身構造の場合とは異なり、(9b)に見られるような動詞的受け身構造の習得が一般的に遅れるということから、(後者のような構造に含まれている)A連鎖の習得は、成熟性仮説に沿って行われているということをも主張している。

- (9) a. The fact was unknown.  
b. John was hit.

同じように、Pierce (1992b)は、スペイン語の場合も、A連鎖を含む受け身文は、A連鎖を含まない受け身文（および能動態文）の場合と比べて習得が遅れるというデータを示し、これにより成熟性仮説が支持されることを論じている。<sup>12</sup> このように、成熟性仮説は、動詞的受け身文の習得が一般的に遅れるということを示すデータにより支持されることになる。（ほかに、受け身文の第一言語習得がかなり遅れることを示す実験データについては、O'Grady (1997: 192-202)を参照。）

一方、受け身文の習得がかなり早い時期(2-4歳)から見られるとする研究も存在する。O'Grady (1997: 202ff.)はそのような研究の例として、英語に関しては、Pinker, Lebeaux, and Frost (1987), Budwig (1990), Snyder and Stromswold (1994) [= Snyder and Stromswold (1997)] を、またそれ以外の言語に関しては、Demuth (1989)(バンツー語のひとつセソト語 (Sesotho) についての研究)および Pye and Poz (1988) (キチェ・マヤ語 (Quiché Mayan) についての研究)などを挙げている。英語以外の言語の例としてほかに、Allen and Cargo (1993)がイヌクティウト語 (Inuktitut) の場合を取り上げ、二歳段階ですでに(A連鎖より成る)受け身構文が習得されていることを論じている。

もしこのように、A連鎖より成る受け身文の第一言語習得がかなり早い時期から見られるということが一般的な事実だとするならば、その点で、A連鎖の成熟性仮説自体は見直しを迫られるであろう。(Borer and Wexler (1987)の成熟性仮説に対する批判としては、Weinberg (1987), Clahsen (1992:70-75), Moore (1993: 18-19), Allen and Crago (1993), Köppe (1994: 212-218), Hoekstra (1990), Snyder and Stromswold (1997: 294, fn. 18), Fox, Grodzinsky, and Crain (1995), Fox and Grodzinsky (1998)などがある。)

ただし、名詞句移動の知識が(したがってA連鎖の知識も)まだ習得されていないとする時期を、Radford (1990: 257)のように、たとえば生後20~23か月(±20%)のように、もっと早い時期として設定すれば、Borer and Wexler (1987)の成熟性仮説は保持できる可能性がある。なぜならば、そのような早い時期よりさらに以前の段階では、子供の受け身文の理解および発話にまだ不十分なところがあるはずなので、子供のそのような状態がなぜ起こるかということに対し、A連鎖がまだ習得されていないからだというような、成熟性仮説に基づいた説明を与えることが可能となるからである。

いずれにしても、(A連鎖を含まない)能動態の文の場合と比べて、A連鎖を含む受け身文の習得のほうが後になるというのは、一般的な事実として受け入れてよいと思われる(cf. Fraser, Bellugi, and Brown (1963), Bever (1970: 303ff.), de Villiers and de Villiers (1978: 80; 1979: 76-79), Maratsos (1974))。このことと密接に関連する現象として、次のような、失語症あるいは失文法の場合が考えられるであろう。すなわち、失語症の患者の中には、能動態の文の理解は正しくできて、受動態の文を正しく理解できない患者がいることが知られている。その理由として、(受動態の構文に含まれる)A連鎖に関する言語知識に問題が生じた結果であると考えられる(Grodzinsky (1986; 1990: ch.3), 萩原 (1992, 1998))。

ただし、Hoekstra (1990: 81-82)は、ある種の受動態構文の習得が遅くなる原因として、A連鎖そのものの成熟性によるものではなく、おそらく、行為者をあらわす *by-*

phrase の用法に含まれるメカニズムの習得が成熟性に支配されているためであろうと  
いうことを指摘している。

これと同じような考えに沿って受動態の習得の実験を試みた Fox and Grodzinsky  
(1998: 311)も、次のような結論を得るに至っている。すなわち、外項に付与すべき意  
味役割を、受動態の場合には、外項から *by*-phrase に正しく転位させなければなら  
ないのであるが、習得のある段階の子供達はまだこの知識が身につけていない。た  
だし、受動構文についてのその他の知識は、(A 連鎖についての知識も含め) 全て備わ  
っていると考えられる。したがって、英語の受動態(特に *by*-phrase が明示された動  
詞的受動態)の習得が一般的に遅れるとしても、それは A 連鎖の知識が習得されて  
いないからだということにはならない。つまり、A 連鎖の成熟性についての Borer and  
Wexler の主張は受け入れがたいということになる。

日本語の受動態の習得についても、Harada and Furuta (1998)によると、A 連鎖を含  
む受動文は習得が遅れるとは一般的に言えないようである。日本語の受動態の場合、  
「太郎が花子にたたかれた」のような直接受け身文(*direct passives*)と比べて、「太郎  
が花子に死なれた」「太郎が花子に(大きな声で)歌を歌われた」のような間接受  
け身文(*indirect passives*)(これを「被害の受け身(*adversative passives*)」と呼ぶこともあ  
る)の習得が一般的に遅れることが知られている(詳しくは、古田智子(1998), Harada  
and Furuta (1998)を参照)。このように、間接受け身文の習得が一般的に遅れるのは、  
次のような理由によるものと考えられる。すなわち、間接受け身文が正しく認識で  
きるためには、(直接)受け身文を理解するのに必要な言語能力のほかに、「被害」  
という概念を正しく理解できるだけの認知能力の発達が必要とされると思われる。  
また、前者の言語能力が習得される時期と、後者の認知能力が習得される時期との  
間には、ある程度の隔たりがあると思われる。したがって、この隔たりのために、  
子供は、ある一定の期間、直接受け身文は理解できても、間接受け身文を正しく理  
解できないという状況を呈することになるのであろう。

以上、受け身文の第一言語習得について概観したが、次に、A 連鎖を含む構文の  
もうひとつの場合として非対格構文について、その言語習得の特徴がどのようなも  
のであるか考えてみよう。

#### 4. 非対格動詞の習得

##### 4.1. 非対格動詞の第一言語習得

「純然たる」自動詞、すなわち非能格動詞と、部分的に他動詞的特徴を備えてい  
ると見なすことのできる自動詞、すなわち非対格動詞の違いは、自動詞対他動詞の  
違いと比べると、かなり微妙な点についての違いである。このような違いが、第一  
言語習得の場合において、幼児にとってどのように認識されているかという問題は  
大変興味ある問題である。

このような問題に関連する興味あるデータのひとつとして、次のようなものを取り  
上げることができる。下記(10a-b)は、英語を母語とする二歳児の発語データの  
一部である (Braine (1976: 34-35)よりの引用として Radford (1990: 247)が挙げているも  
の)。

- (10) a. Mommy sit./Daddy sit./Andrew walk./Daddy walk./Boy walk./  
Man walk./Daddy work.

- b. Hurt Andrew./Hurt fly./Hurt knee./Hurt plane./Hurt hand./Split bread./Spilt raisin./Bounce ball.

(10a)に見られる動詞 sit, walk, work はいずれも非能格動詞であり、一方、(10b)に見られる動詞 hurt, split, bounce はいずれも非対格動詞である。重要なことは、前者では、主語・動詞の語順が正しく守られているのに対し、後者においては、動詞が主語の後ろに位置し、正しい語順とはなっていないことである (Radford (1990: 247)によると、この幼児の場合、非対格動詞については常に (10b) のような語順をとるとのことである)。

同じような事実の指摘は Pierce (1992a: 19-29), Déprez and Pierce (1993: 43)にも見られる。たとえば、後者によると、幼児の用いる英語の文の中で、「動詞+主語」の語順を持つ平叙文の 90%は、下記(11)のような非対格動詞を含む文であるとのことである。

- (11) a. Going it. (Naomi, 1-10-1)  
b. Going (re)corder. (Naomi, 1-10-1)  
c. Come car. (Eve, 1-6-0)  
d. Came a man. (Eve, 1-8-0)  
e. Fall pants. (Nina, 1-11-2)  
f. Fall down lady. (Nina, 1-11-2)  
g. Come Lois. (Peter, 2-1-4)  
h. Broken the light. (Peter, 2-2-0)

(それぞれの例文の後ろの ( ) の中に示されているのは、幼児の名前(偽名)および年齢(年・月・週)である。

一方、非能格動詞の場合は、Rutherford (1998: 198)も指摘しているように、下記(12)のような文を幼児が発話することはほとんど見られないということである。

- (12) a. Sleeping daddy.  
b. Eat mommy.  
c. Sit mommy.  
d. Kick daddy [ agent ].  
e. Sleep baby.  
f. Bark doggie.  
g. Push mommy [ agent ].  
h. Run doggie.

第2節において述べたように、非対格動詞は外項を欠くので、大人の文法では、D構造において目的語の位置を占める内項を主語の位置に配置させ(すなわち、外項化させ)なければならない。ところが、上で取り上げた幼児の場合(例文(10b)-(11)参照)、そのような外項化は起こっていない。これはどうしてであろうか。Radford (1990: 246-247)によると、生後 20~30 か月(±20%)までの子供は、たとえば Agent といったようにある決まった主題役割を持つ項だけを外項化するという。すなわち、この時期の子供は、彼の言う「統一的主題役割外項化のメカニズム(uniform thematic externalization mechanism)」に従っていると考えられる。したがって、行為者(Agent)としての主題役割を持つ項を名詞句として選んだ(10a)のような文の場合は、その項を主語の位置に外項化させた正しい語順の文を用いているが、一方、そのような項

を持たない(10b)のような非対格動詞の場合は、外項化を起こさずに、常に動詞・主語の語順のまま用いることになる。

さらに、この年齢の子供は、大人の文法に見られる(たとえば、格理論や機能範疇 INFL のような)機能的システムがまだ習得されていないので(Radford (1990))、大人の場合とは異なり、そのような機能的システムの要請に従って、(10b)のような文に見られる構文を、“Andrew hurt,” “Bread split,” “Ball bounce” のような構文へと変化させることがないとも考えられる。<sup>13</sup>

以上の観察から分かるように、子供は、たとえ、主語および動詞の S 構造における語順についての知識については、まだ不十分な点があるとしても、かなり早い時期から、非能格動詞と非対格動詞の違いを認識している可能性がある(同じような習得の事実の観察の例として、Moore (1993: 18-19), Köppe (1994: 214)を参照。特に、イタリア語とオランダ語、およびフランス語とイタリア語についても同じことが言えるという指摘については、それぞれ、Hoekstra (1990: 77, 81)および Snyder, Hyams, and Crisma (1995)を参照。なお、Snyder and Stromswold (1997: 294)によると、非対格構文は平均して受け身文より 3.6 ヶ月早く習得されるとのことである。ただし、非対格構文に見られる A 連鎖の習得の時期について、確かなことはまだ分かっていない(cf. Babyonyshev et al. (1995), Fox and Grodzinsky (1998: 316, fn. 19) )。

次に、このことと関連ある事実として、“The Human Language Series”(Program Two: Acquiring the Human Language)と題するビデオ作品(製作者: Gene Searchinger; Equinox Films, Ways of Knowing, Inc., New York, 1995)の中で紹介されている、次のような言語習得の事実が参考になるので取り上げてみよう。すなわち、下記(13a)に示すように、“John ate”が“John ate something-or-other”の意味であることを理解できる子供(ただし、ビデオの中では、子供のはっきりした年齢は特定されていない)は、一方、(13b)に示すように、“John grows”については、(13a)と同じような解釈を類推的に当て嵌めるといった間違っただ判断をするということはない。すなわち、大人と同じように、これを正しく(非対格構造の文として)理解できるということである。

- (13) a. John ate. = John ate something-or-other.  
b. John grows. John grows something-or-other.

ビデオの中では、(13)に示された事実は、言語習得のメカニズムにおいて「類推(作用)」が占める役割は、一般の人が普通考えているほど重要な働きをしていないという事実を示すために用いられているのであるが、これを、ここで取り上げたように、非対格動詞についての子供の言語知識がどのようなものであるかということを示すデータのひとつとして、次のように据え直すことができるであろう。すなわち、動詞 grow には“John grows”のような非対格動詞としての用法のほかに、“John grows tomatoes”のような他動詞(使役動詞)としての用法があるが、eat, drink, read, smoke, teach, swallow, write のような他動詞<sup>14</sup>の場合とは異なり、目的語が明示されない用法は許されない。したがって、“John grows”が文法的文だとするならば、その文の解釈は、非対格動詞としての解釈であるということになる。子供はすでにそのことを認識しているように思われる。

以上、非能格動詞と非対格動詞の違いが、かなり早い時期に子供によって認識されている可能性があるということを示すデータについて観察した。もちろん、(10b), (11)のような文が非文であるということが認識できるようになるためには、(格理論

を含む) 機能的システムについての知識、および非対格動詞が目的語に格を付与できないという特徴を持つことについての知識、が発動されるようにならなければならない。それまでは、(10b), (11)のような(一見、非対格動詞についての知識が子供に全く欠けていることを示すかのようにも見える) 発話文を、その非文法性を認識できないまま用いることになる。

次に、非対格動詞についての子供の知識が大人のものとは異なることを示す、別の種類の言語事実を取り上げてみよう。

子供が次のような非文を発話することがあるということが知られている (Bowerman (1987: 447)より)

- (14) a. \*Do you want to see us *disappear* our heads? (Then, with a friend, she ducks down behind couch.) (6+)  
b. \*It always *sweats* me. (Refusing sweater.) (4;3)

上記(14)の文に用いられている動詞 *disappear*, *sweat* はいずれも非対格動詞であるが、上で簡単に触れた動詞 *grow* の場合と異なり、これらの動詞は使役動詞としての用法が許されない。すなわち、非対格動詞には、*grow* のように使役動詞としての用法を併せ持つような動詞と、*disappear*, *sweat* のように使役動詞としての用法を持たないような動詞の二つの種類がある。ここで、非対格動詞の用法と使役動詞の用法を併せ持つ動詞のほかの例を(15a)として、また、一方、使役動詞としての用法を持たない非対格動詞のほかの例を(15b)として、それぞれ以下に挙げておこう。<sup>15</sup>

- (15) a. *break, burn, drop, freeze, melt, move, roll, scatter, sink*<sup>16</sup>  
b. *bubble, come, die, exist, fall, glitter, go, happen, occur*

上記の例文(14)に見られる誤りは、使役動詞としての用法の許される(15a)の動詞にならなくて(下記(16)の文を参照)、その許されない(15b)の動詞にまで使役動詞としての用法を拡張させた、過剰一般化の例であると見なすことができる (cf. Borer and Wexler (1987))。

- (16) Peter moved the doll.

ここで注意しなければならないのは、この種の過剰一般化が見られるのは、非対格動詞の場合だけに限られることではなく、次の例に見るように、非能格動詞の場合にも、同じような過剰一般化が見られるということである ((17a), (17b-c)は、それぞれ Borer and Wexler (1987: 140) および Bowerman (1987: 447)より。各例文の後ろの( )の中には、それぞれの非文に対する文法的文が示されている。)

- (17) a. \*John *giggled* the doll. (cf. The doll giggled.)  
b. \*I don't want any more grapes; they just *cough* me. (cf. I cough.)  
c. \*Will you *climb* me up there and hold me? (cf. I climb up there.)<sup>17</sup>

このような一般化が起こるメカニズムを Borer and Wexler (1987: 157-161)は次のように説明している。A 連鎖がまだ習得されていない時期の子供は、非対格動詞も非能格動詞と同じように、(純然たる)自動詞であると判断する。子供の周りにいる大

人の発話の中に含まれている(16)のような文が引き金となって、子供は、次のような内容を持った(有標の)使役化(causativization)の規則を想定する。すなわち、まず、自動詞構文に外項を新たに追加し、その結果、今まで外項であった項が目的語の位置に移る、すなわち内項化(internalize)される。その結果、(大人の場合は、使役化の構文が許されるのは、一般的に非対格動詞の場合に限られるのにもかかわらず<sup>18)</sup>子供は、非能格動詞からなる“The doll giggled”のような文にまで使役化を拡大適用させる結果、(17a)のような非文が生成されることになる。

A連鎖が習得されると、それでは、どうしてこのような過剰一般化が起こらなくなるのであろうか。この問題に対するBorer and Wexler (1987: 159)の説明を取り上げてみよう。その前に、その説明の中で重要な位置を占める有標性の概念について簡単に説明しておこう。すなわち、上で見たとおり、子供が想定する使役化の規則は、外項化と内項化の二つの変化を同時に含んでいる。一方、大人の場合の使役化の規則は、内項化の変化を含まず、外項化の変化だけからできている。すなわち、大人にとっての使役化の規則は、たとえば、“The doll moved”のような文の基底を成す[ V NP ]のような非対格構文に、外項化の変化を加える、すなわち、行為者としての主題役割を持った名詞句<sup>19)</sup>を新たに主語として加えるという働きを持つ。<sup>20)</sup>

子供の想定する使役化の規則と大人のそれとを比べた場合、外項化の変化を含むという点では同じであるが、内項化の変化がさらに加わるという点で、前者はそれだけ「有標の(marked)」規則となっていると言える。<sup>21)</sup>文法規則を用いた文の生成および理解の過程を大脳内部での認知的演算(あるいは計算)としてとらえた場合、一般的に、認知的演算の量が少ない規則(適用)のほうが、コストが少なくすみ、それだけ「無標の(unmarked)」規則(適用)であるということになる(Borer and Wexler (1987: 159))。ある規則の適用に関し、有標とされる適用の仕方と、無標とされる適用の仕方とが併存する場合、一般的に、後者のほうが選ばれる(これを仮に「有標性の原理」と呼んでおこう)。このような選択は、「経済性の原理(economy principles)」(Chomsky (1995))の観点からもうなずけるであろう。

なお、上で取り上げた有標の使役化(marked causative rule)のような規則は原理的に許されず、したがって、そのような規則を仮定するBorer and Wexler (1987)の分析自身問題となるという指摘についてはHoekstra (1990: 77-79)を参照。

ところで、言語習得のある段階で、いったんA連鎖の知識が習得されると、今まで非対格動詞と非能格動詞の区別なく共に(純粋な)自動詞であるとみなしていた知識(すなわち語彙目録の内容に関する知識)に変化が生じてくる。すなわち、その時点で、A連鎖をその構造表示の一部に含むような自動詞構文、つまり、非対格構文が、可能な構文のひとつとして認識できるようになる。つまり、自動詞には、非対格動詞と非能格動詞の区別があるという認識が芽生えることになる。この段階に達すると、子供がそれまで用いてきた有標の使役化規則適用の他に、新たに無標の使役化規則適用の道が開かれることになる。そこで、上で述べた有標性の原理に基づき、無標の適用過程を含む使役化規則のほうを選び直すこととなる。そのことにより、使役化が可能なのは非対格動詞の場合だけであるという認識が得られることになる。すなわち、その時点以降、使役化に関する過剰一般化の現象のうち、少なくとも、非能格動詞に関する部分は姿を消すことになる。(ただし、非対格動詞でも、上記(15b)のような動詞の場合は使役化が不可能であるということについては、さらなる学習が必要となる。)

ところで、大人における使役化規則適用の場合、外項化の変化だけで、内項化の変化が起こらないのはどうしてかという疑問が生ずるかもしれない。その答えは次のようになる。すなわち、まず、使役化規則により非対格構文の主語の位置に（行為者としての主題役割を持つ）外項が付け加えられることにより、それまでは、もとの位置のままでは格が与えられなかった目的語に、「Burzio の一般化」により）格を付与することが可能となる。つまり、目的語を移動させなくても格フィルター違反とはならないので、目的語は移動せず、もとの位置に留まる。したがって、目的語の位置が空とならないので、内項化の変化も起こらないというわけである。（一方、目的語はすでに非対格動詞によって主題役割（すなわち、被動者 (Patient)あるいは主題(Theme)としての主題役割）を与えられているので、基準(-criterion)、すなわち、「各項には主題役割がひとつずつ（また、ひとつだけ）与えられ、また、各主題役割はひとつの項にのみ付与される」(Chomsky(1981: 36))という条件を満たすことになり、この点から見ても、目的語を移動させる必要はないこととなり、やはり内項化の変化は起こらないことになる。）

しかしながら、非対格仮説および有標性の原理（あるいは経済性の原理）に基づくこのような説明には、Weinberg (1987: 181-182)が指摘するように問題がある。すなわち、この説明の主要な点は、使役化規則の適用に関して、有標の適用の仕方と、無標の適用の仕方の両方が可能性として与えられている場合、有標性の原理により、一般的に後者が選ばれるというものである。もしこのような考えを受け入れるとするならば、当然、同じ原理により、非対格仮説そのものの妥当性が問われることになる。なぜならば、非対格仮説（そのうちの特に、非対格動詞の持つ D 構造に関する部分）によると、非対格動詞は目的語に格を付与できないので（また、それと同時に、D 構造において主語を持たないので）、名詞句移動により、目的語を主語の位置に移動させなければならない。ところが、非対格構文の分析として考えられるものとしては、これが唯一のものではない。上ですでに考察したように、子供が（誤って）想定するとされる分析、すなわち、非対格動詞は、非能格動詞と同様、[NP [ <sub>VP</sub> V ] ] の構造を D 構造の段階ですでに持っているとする分析も、論理的に考えられる分析のひとつである(事実、英語の第二言語習得の場合に見られる初期の段階の中間文法においては、非対格動詞も非能格動詞と同じように、[NP [ <sub>VP</sub> V ] ] のような構造を持つとするアイデアが提案されている(cf. Oshita (1997))。特に重要なことは、この二つの分析のうち、後者のほうがむしろ有標性の原理に叶っているということである。すなわち、前者が名詞句移動の適用に頼らなければならないのに対して、後者は、何ら名詞句移動を必要としないので、それだけ前者のほうが有標であることになる。つまり、有標性を廃するために選んだはずの分析（すなわち、非対格仮説に基づく使役化規則適用のアイデア）に、別の種類の有標性が潜んでいたということである。

このように、A 連鎖の知識が利用できるようになると、それまで子供が採用してきた、非対格動詞についての分析に再分析が加えられるようになるとする Borer and Wexler の主張は、再考を迫られることになる。さらに、このことにより、Borer and Wexler のもうひとつの主張、すなわち、子供の言語習得において、使役化の規則が過剰一般化して適用されることがあるということを示すデータにより成熟性仮説が支持されるとする主張も、その根拠の重要な部分を失うことになる。

ところで、§3 においてすでに述べたように、Allen and Crago (1993)は、イヌクティウト語では、二歳児段階ですでに（A 連鎖より成る）受け身構文が習得され

ていることを論じている。同じように、非対格動詞についても、ほかの動詞の場合以上に習得が困難であったり、過剰一般化の誤りが見られたりすることはないと述べている。このことにより、Allen and Crago は、Borer and Wexler (1987)の主張する成熟性仮説は正しくなく、むしろ、連続性仮説のほうが正しいと述べている。

ただし、(A 連鎖より成る)受け身文を正しく理解できたり、使役化規則を正しく適用できたりする時期が、言語によって異なり得るということが事実だとするならば、この事実は、連続性仮説のもとではうまく説明できないのではないかと思われるかもしれない。そのような疑問に対して、Allen and Crago は次のように説明する。すなわち、言語によっては、問題の言語知識の習得が早い時期から見られるが、それは、次のような個別言語に特有な要因が作用する結果、習得の時期がそれだけ促進されるからであると説明している。そのような要因の例として、Allen and Crago は、イヌクティトゥート語では、大人が完全な形の受け身文を一定時間内に用いる頻度が、英語の場合の少なくとも 2.8 倍は多いというデータを示している。すなわち、イヌイットの子供は、それだけ早くから受け身文に接する機会が多いというわけである。

さらに、イヌクティトゥート語は、能格言語のひとつであり、他動詞構文、受け身文、あるいは非対格構文のいずれの構文にあっても、基底構造で目的語の位置に現れるすべての項は、格を得るために、名詞句移動によって主語の位置に引き上げられなければならないという特徴を持つ(Allen and Crago (1993: 26))。このことから、イヌクティトゥート語では、受け身文や非対格構文に見られる名詞句移動が、ごくありふれた、また、きわめて重要な現象のひとつであることになる。早い時期から子供が受身文(や非対格構文)をたやすく理解できたり、用いたりするのはこのためである。

以上、この節では、非対格動詞についての第一言語習得に見られるいくつかの特徴を取り上げた。次の節では、第二言語習得において、どのような特徴が見られるか考察してみよう。

#### 4.2. 非対格動詞の第二言語習得

英語を外国語として学ぶ学習者に見られる誤りのうち、非対格動詞に関するものの例としては、次のようなものがある((18a-e)および(18f)は、それぞれ、Zobl (1989: 204) および Rutherford (1997: 199)より。<sup>22</sup> 各例文の後ろに示されているのは、学習者の母語および習熟度である)。

- (18) a. \*The most memorable experience of my life *was happened* 15 years ago.  
(Arabic native language [ L1 ]; advanced learner)  
b. \*Most of people *are fallen in love* and marry with somebody.  
(Japanese L1; high intermediate)  
c. \*My mother *was died* when I was just a baby. (Thai L1; high intermediate)  
d. \*Sometimes *comes a good regular wave*. (Japanese L1; low intermediate)  
e. \*I was just patient until *dried my clothes*. (Japanese L1; high intermediate)  
f. \*After a few minutes *arrive the girlfriend* with his family.  
(Spanish L1; low intermediate)

このデータの中に見られる誤りを、二つの種類に分けて考えることができる。そ

のひとつは、受動態に関する誤り ((18a-c)) であり、もうひとつは、必要な主語名詞句が欠落している、あるいは、主語名詞句の位置が正しくないことによる誤り ((18d-f)) である。この二つの種類の誤りを、非対格仮説の観点からもう少し厳密にとらえてみることにしよう。

まず、(18a-c) についてであるが、大人の英語母語話者の文法においては、非対格動詞 *happen, fall, die* の D 構造における目的語を主語の位置に移動させる名詞句移動の中には、その名詞句移動に加えてさらに受動形態素 (*be-en*) を付加するというような変化は含まれていないので、*was happened, are fallen in love, was died* のような受動形態を用いると誤りとなる。<sup>23</sup> (18a-c) のような誤りは、受身規則適用の過剰一般化の例として普通解釈されている。<sup>24</sup>

一方 Kitagawa (1995: 228) は、このような非対格動詞に関する誤りを、下記例文 (19) のような、引き上げ動詞 (*raising verb*) に関する受け身構文の誤りの場合と同じようにとらえ、<sup>25</sup> いずれも、関係文法研究の中で提案されている下記 (20) のような “1-Advancement Exclusiveness Law” (cf. Perlmutter and Postal (1984: 87), Perlmutter and Rosen (1984: xi)), すなわち、「いかなる節も、主語の位置への移動を 2 つ以上含んでいてはならない」の違反とみなすことができるということを指摘している。

(19) \*John<sub>i</sub> was seemed t<sub>i</sub> to be unhappy.

(20) The 1-Advancement Exclusiveness Law:

No clause can have more than one advancement to 1 [= subject]

もうひとつの解釈は、§4.1 で取り上げた使役化規則の過剰一般化の例とみなす方法である。すなわち、使役化規則が適用できないはずの非対格動詞 *happen, fall, die* にまず使役化が誤って適用され、それによりできあがる他動詞構文 [NP V NP] に、さらに受動態規則が適用された結果 (18a-c) が生成されると見る方法である (cf. Yip (1989, 1995))。 (この二つの解釈の比較については、§5 で検討する。)

上で取り上げた(18a-c)の例によく似たものとして、さらに下記(21a-c)のような非文の場合を考えてみよう(なお、参考のために、(21a-c)に対応する文法的文を(22a-c)として下に示しておこう)。<sup>26</sup>

(21) a. \*The door *was closed* smoothly because Mary had remembered to oil the hinges.

b. \*This soup *was tasted* good after the cook had added some salt.

c. \*For last 15 years computers have drastically affected our life and this will *be continued* in the future.

(22) a. The door *closed* smoothly because Mary had remembered to oil the hinges.

b. This soup *tasted* good after the cook had added some salt.

c. For last 15 years computers have drastically affected our life and this will *continue* in the future.

例文(21a-c)は、いずれも、非対格動詞を受け身文として用いているという点では、上記(18a-c)の例と同じである。ただし、(21a-c)の例は次のような点で(18a-c)とは異なる、いわば「より高級な」誤りとみなすことができる種類の例である。すなわち、(18a-c)は受け身の形で用いること自体が許されない動詞の場合であったが、(21a-c)は他動詞用法をも併せ持つ動詞の例なので、受け身文にすること自体が許されないわけではない。ただ、このような具体的文脈の中では、非対格構文を用いるのが正しく、受

け身文は許されないということである。そのことを正しく判断できるようになるためには、非対格構文と受け身文の持つ微妙な意味の違いに関する、かなり高度で微妙なところのある文法的知識を身につけなければならない。<sup>27</sup> (このような文法的知識の中身を説明するためには、そのような観点を取り入れた非対格構文についてのさらなる研究が必要となるが、それについては、別の機会に取り上げたい。)

ところで、第一言語習得の場合は、第二言語習得の場合と異なり、受動態に関するこのような誤りが通常起こらないと考えられる(cf. Oshita (1997: 306ff.))が、その理由は次のようなものであろう。まず、(すでに§4.1でも述べたように)非対格構文は通常受け身構文より早く習得される(cf. Snyder and Stromswold (1997: 294))と考えられる。また、非対格構文に見られる名詞句移動は、普遍文法の一般的原理の発動そのものによるのであり、受け身構文に見られる名詞句移動が類推的に、または並行的に適用された結果得られるのではない。したがって、非対格構文における名詞句移動適用の際に、(後から習得される)受け身構文に作用する名詞句移動との類似性が引き金となって、受け身文の形態的特徴が類推的に非対格構文に持ち込まれるというようなことはない。

第二言語習得に話題を戻すと、上記の例文(18a-c)および(21a-c)のような非文を英語の第二言語学習者が作り出す傾向があるということと密接に関係する事実として、同じ学習者が、(22a-c)のような非対格構文より成る文法的な文を非文と見誤る傾向があるということを示すことができる。Oshita (1997: ch. 3)に従って、これを別の言葉で言い換えると、これらの学習者は、NP-Vの語順(特にVが起動動詞(e.g. break, burn, drop, freeze, melt, move)の場合)を一般的に避ける傾向があるということになる。(英語の第二言語学習者に一般的に見られるこのような特徴を取り上げた研究の例として、Oshita (1997: 143-146)は、Kellerman (1978), Yip (1989, 1994, 1995), Hirakawa (1995)を挙げている。)

次に、(18d-f)について。上で述べたように、これらの文には、表面上必要な位置に主語が欠けている。動詞 come, dry, arrive は非対格動詞なので、非対格仮説によると、D構造において主語名詞句が欠けているのは、むしろ当然なことと言える。しかし、すでに述べたように、英語の場合、一般的に、少なくともS構造においては主語名詞句の存在が必要となるということ(および、このD構造のままでは、目的語にしかるべき格が付与できないということ)により、目的語を主語の位置まで移動させなければならない。<sup>28</sup>

したがって、この種の誤りのデータは、§4.1で検討した、第一言語習得の場合に見られる誤りの例(10b)[= Hurt Andrew/Hurt fly/Hurt knee/Hurt plane/Hurt hand/Spilt bread/Spilt raisin/Bounce ball.]に相当することになる。なお、特に(18d-e)のような誤りの例は、少なくとも日本人学習者にとっては、初期の学習段階にある学習者の場合ではないかと思われる。そのような誤りが見られるとしたら、それは、日本語が英語と異なり、時制文においても空主語(null subject)が許される言語であるということと何らかの関係があると思われる。一方、このような例文(および例文(18f))に相当する文が文法的となるイタリア語やスペイン語などの言語<sup>29</sup>を母語とする英語の第二言語学習者の場合は、(日本人学習者以上に)この種の誤りが多く見られるのではないかということが予想される。事実、このことを裏付けるような研究のひとつとしてOshita (1997)を挙げることができる。

Oshita (1997: ch. 4)は、Longman Learners Corpus (1993年版)のデータベースをもと

に、イタリア人、スペイン人、日本人および韓国人の英語学習者の書いた英語の文章の中から、非能格動詞(*cough, cry, dance, joke, laugh, shout, smile, speak, talk, walk*)および非対格動詞(*appear, arise, arrive, die, disappear, exist, fall, happen, occur, rise*)を含むもの全部で 941 例を調べた結果、英語では誤りとなる $[S[NP]] [VP V NP]$ の構文<sup>30</sup>を用いた例が 16 見付かった。そのうち、イタリア人によるものが 7 例、スペイン人によるものが 8 例、日本人によるものが 1 例、韓国人によるものは零であった。このことから、イタリア人およびスペイン人の英語学習者と比較して、日本人および韓国人の英語学習者の間では、少なくとも中級以上の学習者の場合は、 $[S[NP]] [VP V NP]$ の構文を用いた誤りはきわめて少ないことが分かる。

このように、英語学習者の書いた英語の文章の中に見られる誤りをデータとする事実調査をする一方、Oshita は、日本人大学生 168 人、イタリア人大学生 64 人、アメリカ人大学生 24 人を被験者とした次のような文法性判断テストも行なっている。すなわち、非対格動詞の中から *exist, appear, happen, remain, arrive, occur* を選び、それらの動詞を含む $[S[NP]] [VP V NP]$ の構文よりなる文が英語では非文となることを正しく判断できるかどうかを実験で調べた結果、正しく答えられる被験者の数の多い順に 3 つのグループを並べると、アメリカ人大学生、日本人大学生、イタリア人大学生の順になり、それぞれのグループの間には統計的に有意差が見られることが分かった。<sup>31</sup>

次に取り上げるのは、使役化とはいわば反対の生成過程をたどる規則(注 20 を参照)についての過剰一般化の例である。次のような例文(Balcom (1997: 6)より)を見てみよう。

- (23) a. \*... and almost all major businesses *destroyed*.  
 b. \* ...that my own home on Devon Row *included* in the destruction.  
 c. \* Many students *involve* in plagiarism but they do not consider their behaviour as cheating.  
 d.\* The main issue in the World Summit which *held* in Rio de Janeiro ....

例文(23a-d)は、上記(21a-c)と同じように、中国語を母語とする英語学習者に見られる誤りの例である。動詞 *destroy, include, involve* および(23d)におけるように、「会を催す」の意味の動詞 *hold* はいずれも非対格動詞ではなく他動詞なので、(23a-d)のような文は非文となる(受け身文として表現すべきところを、このように非対格構文を用いる誤りのことを「疑似受け身文(pseudo-passive)」と呼ぶことがある(cf. Rutherford (1998: 279))。このような誤りを犯す英語学習者の中間文法の中の語彙目録には、おそらく、これらの動詞が非対格動詞(あるいは非能格動詞)として誤って登録されているのであろう。<sup>32</sup>

ちなみに、本来他動詞として用いるべき動詞を、このように、非対格動詞(あるいは非能格動詞)として用いるような誤りについて、Zobl (1989: 217)は、論理的には可能だが、実際には起こらないとみなしているようだが、Balcom (1997: 6)も指摘しているように、これは事実には合わない。Zobl の調べたデータの中には、そのような誤りの例が一例も見付からなかったとのことであるが(p. 217)、後で述べるように、この種の誤りは、日本人の英語学習者にも実際見られるもので、たとえ起こる頻度は比較的少ないということが言えるとしても、ある特定の範囲のデータの中に例が一つも見つからなかったというのは、おそらく、偶然のことであろう。<sup>33</sup>

Zobl (1989: 217)はまた、このような他動詞から非対格動詞への自動詞化（注 20 を参照）についての過剰一般化が（彼が調べた限りでは）起こらない（すなわち、この点に関し、英語の第二言語学習者がきわめて保守的である (p. 217)）ことから、次のような Maranz (1984: 181-182)の主張を支持することができるかと述べている。すなわち、Maranz は、他動詞から非対格動詞を導く規則は、（世界の言語全体から見ても）生産的な規則 (productive rule) ではないと主張している。<sup>3 4</sup>一方、非対格動詞から受け身文を導くという誤りは、中核的規則のひとつである受動態規則を過剰一般化したために起こる（いわば自然な）誤りの例であり、実際(18a-c), (21a-c)のような誤りとして普通に見出されるというのが Zobl の主張である。

このような Zobl の主張は、もしそれが、経験的事実によって裏打ちされたものならば、第二言語習得の研究から文法理論の研究に対して重要な示唆を与えることが可能となることを示すひとつの例として興味あるものとなり得たであろう。

## 5. 日本人学習者による誤りの例

日本人学習者による誤りの例は、これまでの議論の中に、すでにいくつか登場しているが、ここでは、筆者がこれまで収集したデータの中からいくつか具体例を取り上げ、これまでの議論をさらに敷衍してみよう。まず、次のような例を考えてみよう。

- (24) a. (English speakers omit the last consonant of the first word when the consonant comes after the last consonant of the first word.) This omitting { *\*is not happened/does not happen* } when the vowel comes after the last consonant of the first word.
- b. These observations { *\*are led/lead* } to the formulation of the following hypothesis.
- c. In Black English, the third person singular suffix { *\*is lacked/\*lacks/is lacking* }, as the following examples show: ....
- d. You will notice that many year-end gifts have { *\*been arrived/ arrived* } .
- e. However, one question { *\*is still remained/still remains* } unsolved.
- f. This is why passivization cannot { *\*be taken place/take place* } in the embedded sentences.

上の例は、英語を学習している日本人の大学生が書いた英語作文の中に見られる誤りの例である（参考のために、文法的に正しい表現の仕方を同時に添えて示してある）。いずれも、§ 4.2 で取り上げた(18a-c)の例と同じように、本来非対格動詞として用いるべき動詞が、受け身構文の形で表れている。

このような誤りを生み出すメカニズムを推測してみると、（すでに § 4.2 で述べた内容と重複する部分もあるが）次のようになるであろう。まずひとつの可能性として、学習者の身につけている文法（中間文法）の中の語彙目録において、動詞 happen, lead, lack, arrive, remain, take place が、大人の英語母語話者の場合と同じように、（少なくとも、非対格仮説の立場からすると、正しく）非対格動詞として登録されていることが考えられる。これらの動詞の D 構造における目的語は、主語の位置に移動させることが必要なので、大人の英語母語話者の場合、名詞句移動を正しく適用させて、求められている文法的文を無事に生成できる。ところが、ここで問題になっ

ているような英語学習者の場合は、名詞句移動を適用するときに、誤って非対格動詞を受け身形態の動詞に変えてしまうということが考えられる。おそらく、受け身構文の生成のときにも同じような名詞句移動規則が適用されるということが引き金となるからであろう。<sup>35</sup>

もう一つ別の解釈として考えられるのは、動詞 happen, lead, lack, arrive, remain, take place が、大人の英語母語話者の場合とは異なり、(純粹な)他動詞として誤って理解されているために、普通の他動詞の場合と同じように、このような受け身文を生成してしまうのではないかということである。<sup>36</sup>

上の二つの解釈を比較した場合、前者の解釈による文の生成においては、名詞句移動の適用に加えて、受け身形態素の導入という二つの認知的演算が含まれているのに対して、後者の場合は、名詞句移動ただひとつの演算により同じ文が生成できることになる。ところで、少なくとも文法的文については、理論的に可能な二つ以上の生成過程がある場合、一般的に、経済性の原理に叶った、生成過程のより単純なほうを仮定し、また、それが実際脳の中で働いている認知的演算の中においても取り入れられているものと考えられている。今ここで問題にしているのは、それとは異なり、非文の生成についてであるが、この場合の非文というのは、あくまでも、大人の母語話者の文法に照らしてみた場合の非文であることに注意しなければならない。すなわち、これらの非文も、もちろん、当の英語学習者としては、文法的文のつもりで用いているのである。彼らの習得している中間文法の中の規則および原理に照らし合わせてみれば、そのような非文も、生成可能な文法的文と判断されていることになる。したがって、第二言語として習得した文法も、第一言語習得のときと同じように、普遍文法によって定義される「可能な文法」(梶田 (1974: ch.1)) のひとつとして習得されたものであるとするならば、第一言語習得のときと同じように、経済性の原理が働いていると考えてよいことになる。つまり、今問題となっている二つの解釈の場合も、経済性の原理に叶う後者のほう、すなわち、非対格動詞 happen, lead, lack, arrive, remain, take place を他動詞として誤って理解しているとする解釈のほうが選ばれることになる。したがって、これが英語学習者が実際に従っている生成過程であると判定してよいことになる。

以上、英語学習者が、非対格動詞を他動詞として誤って習得していると思われる例について検討した。次に、下記(25)のような場合を見てみよう。

- (25) a. The Japanese word for “ brown ” is “ chairo, ” and “ cha ” { \*also pronounces/is also pronounced } as “ sa ” .  
f. This suggests that another consideration { \*needs/is needed } in the explanation of this phenomenon.

これも(24)と同じように、日本人英語学習者の大学生の書いた英作文の中に見られる誤りの例であるが、(24)の場合とは逆に、受け身の形にすべきところを非対格動詞として誤って用いていることを示す例と解釈できる。すなわち、(25a)は、§ 4.2 において取り上げた(23)の例と同じ性質のものである。<sup>37</sup> この種の誤りについての重要な点については、すでにそこで解説したので、ここでは次のことを指摘するだけに留めておこう。すなわち、特に (25a) のような例は、注 33 で紹介した Schachter and Rutherford (1979) の指摘、すなわち、日本語 (および中国語) の「話題 - 評言」の構文が英語に転移されたとする考え、を支持するデータとなり得るのではないかとい

うことである。ただし、そのように解釈する場合、動詞 pronounce は、非対格動詞ではなく他動詞とみなされていることになる。<sup>38</sup>

直感的に判断して、(25a)のような英文を作り出そうとしている英語学習者の頭の中には、おそらく、「『茶』はまた『さ』とも発音する」のような、「話題 - 評言」の構文を持った日本語の文が思い描かれていることであろう。

日本人（および中国人）の英語学習者の場合、非対格動詞の習得に際して、このように、日本語（あるいは中国語）の「話題 - 評言」の構文の干渉が、たとえ部分的にでも見られるという考えについてのさらなる検証については今後の研究にまたなければならない。<sup>39</sup>

なお、たとえば（母語としての）日本語の転移あるいは干渉が、英語の非対格動詞の習得の場合にどのように働いているかを検討するときには、日本語における非対格動詞の持つ特徴についての研究も必要になるが、そのような研究の例として影山（1993, 1996）、Miyagawa（1989）がある。<sup>40</sup>

## 6. まとめ

これまでの説明で明らかのように、英語の母語の習得において、非対格動詞と非能格動詞との違いが、少なくとも部分的には、かなり早い時期から認識されているらしいということが知られている。ただし、自動詞・他動詞の性質を併せ持つ非対格動詞の習得は、「純粋な」自動詞、すなわち非能格動詞の習得と比べると、より時間がかかるということもまた事実のようである。

非対格構文は、統語的規則または語彙的規則としての名詞句移動（あるいは、構造表示の一部としての A 連鎖）を含むという点で、受け身文とよく似たところのある構文である。A 連鎖に関する知識が普遍文法の一部に含まれた知識であるとするならば、言語習得の早い時期から、受け身文および非対格構文が支障なく理解できたり発話できたりすることが一応予測される。言語によっては（たとえば、イヌクティトゥート語のように）、この予測どおりの事実が観察されることもあるようであるが、少なくとも英語のような言語の場合は、この予測どおりとはならず、実際には、A 連鎖に関する知識の習得にはある一定の時間がかかることが観察されている。

一方、A 連鎖に関する知識が普遍文法の一部を成すとしても、必ずしも、その知識が習得の最初の段階から利用できるとは限らないとする考え方がある。すなわち成熟性仮説がそれである。A 連鎖に関する知識の習得が成熟性仮説に沿ってなされるとする Borer and Wexler（1987）の主張は、イヌクティトゥート語のような言語の事実とは合わないと思われるところがあるが、英語のような言語の場合、（特に、A 連鎖の習得が Borer and Wexler が考えているよりもっと早い時期に行われると想定すれば）非対格構文および受け身文についての言語習得の事実とも矛盾しないことを示すことができるのではないかと思われる。

このように、A 連鎖の習得については、言語によって習得の時期が異なるということも考えられるので、成熟性仮説およびそれと対立する連続性仮説のいずれが正しいのかを的確に判定するには、今後さらにこの方面の研究を進めていかなければならない。

非対格動詞の第二言語習得について問題となるのは、やはり A 連鎖についての正確な知識に係わる部分である。特に、非対格構文と受け身文の違いに関する正確な知識の習得が問題となる。受け身文と同じように、非対格動詞の場合も A 連鎖をそ

の構造の一部に含むが、非対格構文は、受け身文のような特別な動詞の形態(*be+V-en*)によって A 連鎖の形成が合図されているわけではない。英語の第二言語学習者の中の、特に初級および中級程度の学習者の場合、この点についての正確な知識がまだ習得されていない学習者がかなりいることが知られている。

学習者に必要な、自動詞・他動詞の違いについての正確な知識の中で、特に(1)受け身構文も非対格構文のいずれも可能となる動詞、(2)そのいずれもが可能だとしても、両者の意味が微妙に異なるような動詞、および(3)一方の構文のみが許される動詞、などの区別についての知識は、かなり高度な知識に属すると思われる。たとえほかの部分の言語知識の点では中級以上であると判断されるような学習者の中にも、この点に関する正確な知識がまだ欠けていると思われる学習者は少なくない。このような知識の中身に関する理論的研究を今後さらに進めるとともに、英語教育の分野でも、そのような理論的研究を取り入れた実践的取り組みが今後求められるところである。

## 注

\* この小論は、千葉(1998)を改訂拡大したものである。なお、この論文は、文部省より神田外大に交付された COE 形成基礎研究費の援助を受けて作成されたものである。

<sup>1</sup> 厳密に言うと、連結（あるいは連鎖）の形成は独立したひとつの原理というより、移動、理論、格理論、投射原理(Projection Principle)などの原理の相互作用により成る複合的原理であると考えられる(cf. Köpcke (1994: 213))。

<sup>2</sup> ただし、自動詞・他動詞の違いが、このように単純に記述できるようなものではないということについては、伝統文法の中でも従来から指摘されてきている。伝統文法の中におけるそのような説明の中で、次のような、Poutsma (1926:45)が挙げている自動詞・他動詞の区別についての解説は、特に興味深いと思われる。

(i) "... the floating nature of transitivity and the various processes by which transitive verbs pass into intransitives and vice versa."

(ii) "... the distinction between transitive and intransitive is, to a considerable extent, rather a syntactic than a semantic one."

Poutsma は上記(i)-(ii)の内容を具体例を挙げながら説明しているのだから、ここではこれ以上深入りするのは避けるが、ひとつだけ解説を付け加えることにしよう。

それは、特に(i)の中で触れられているように、自動詞・他動詞の区別が時代とともに変化し得るということに関連したことについてである。最近の文法研究の論文の中には、ある文の統語構造を取り上げ、「ある要素がある位置から別の位置に引き上げられる」ことを問題にすることがあるが、そのことを英語で表現するとき、動詞 raise の非対格用法を用いて表すことが多いように思う。おそらく、これは、アメリカ英語の語法としての raise を用いているからであり、イギリス英語の語法に従うと、raise は他動詞として用いるのが原則である(cf. Burchfield (1996: 650), Wilson (1993: 359))。

このような語法の違いは、Poutsma の言う"floating nature" の表れのひとつであると考えられる。すなわち、*OED*, 2nd ed.によると、動詞 raise の他動詞用法は 1240 年以來今日まで続いている。一方、その自動詞用法は、それより 200 年ばかり遅れて、1470 年にその初出例が見付かるが、およそ 450 年後(厳密には、1911 年が最終例の年)以降はその用法が廃れていくことが分かる。さらに、raise の自動詞用法に関し、*OED* には「アメリカを除いて現在では廃語」という但し書きがある。(同じような観点から、基本的ないくつかの動詞について、その自動詞用法・他動詞用法の歴史的考察を試みたものに、北爪 (1992, 1993) がある。なお、自動詞・他動詞の違いについての伝統文法的記述の例として、Poutsma (1926)のほか、Jespersen (1927: 319-355), Curme (1931: 437-443) なども参考になる。)

<sup>3</sup> このように、普通、日本語で「非対格」(および「非能格」)と訳される英語の文法用語“ unaccusative ”(および“ unergative ”)は、最初 Geoffrey K. Pullum が Paul Postal にあてた私信(1976年10月30日)の中で提案したのが始まりである(cf. Pullum (1988: 582))。Pullum によると、否定を表す接頭辞 *un-*の付いた用語を彼が思い付いた理由は以下のようなものである(p.582)。

“ ...: if a 1 in a stratum with a 2 is an ergative, a 1 in a stratum with no 2 should be called an *unergative* 1, and likewise, if a 2 in a stratum with a 1 is an accusative, a 2 in a stratum with no 1 should be called an unaccusative 2. ”

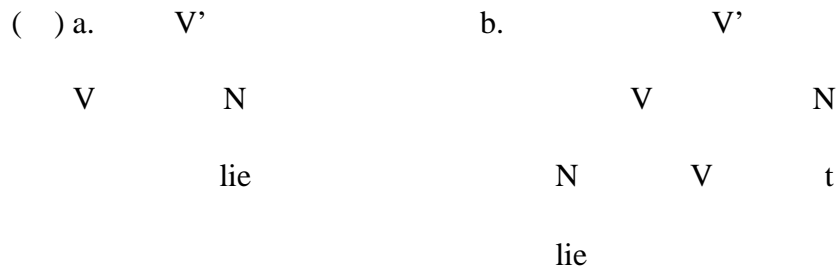
(ここで、1 および 2 とあるのは、関係文法(Relational Grammar)で用いる文法用語であり、それぞれ、主語および目的語のことをいう。)

<sup>4</sup> 能格動詞と非対格動詞を区別することがある。たとえば、下記例文 (Radford (1997a: 368; 1997b: 199))のように、

- (i) a. We *rolled* the ball down the hill.
- b. The ball *rolled* down the hill.
- (ii) a. He *filled* the bath with water.
- b. The bath *filled* with water.

自動詞・他動詞の用法を併せ持つような動詞のみ(あるいは、さらに、そのような動詞のうち特に自動詞用法の動詞のみ)を能格動詞と呼び、これを非対格動詞と区別することがある。

<sup>5</sup> 「『純然たる』自動詞」すなわち“ pure 'intransitives ”(あるいは“ genuine 'intransitive verbs ”)という表現は、O’Grady (1980), Grewendorf (1989)などで用いられている。ただし、「純然たる」自動詞についても、これを「隠れた他動詞 (hidden transitives)」(cf. Chomsky (1995: 315))あるいは「潜伏対格(concealed accusatives)」(cf. Chomsky (1995: 352))とみなす分析も提案されている。そのような分析によると、たとえば、He may lie to you のような文の中に現れる lie は、下記(ia)のような対格構造において、目的語の名詞 lie を抽象的動詞 (これを「軽動詞(light verb)」と呼ぶことがある)に付加することにより得られる ( (ib)参照 ) (cf. Hale and Keyser (1993), Radford (1997a: 390-392; 1997b: 209-210))。



<sup>6</sup> 非対格仮説が、イタリア語のような言語だけでなく、英語にも当てはまるとする主張に対する批判としては、Napoli (1988)を参照。非対格動詞の特徴を、非対格仮説のように、統語的に説明しようとする立場に対する批判としては、Van Valin (1987, 1990)がある。一方、非対格仮説の有効性を認めた上で、さらに、語彙的・意味的特徴の違いをもとに、きめ細かい分析を試みようとするものとしては、Levin and Rappaport Hovav (1989), Sorace (1993, 1997), 影山 (1996)がある。なお、非対格構文の D 構造における目的語を主語の位置に移動する規則は、非対格仮説においては統語的規則の一つとして扱われているが、この規則を統語的規則ではなく、語彙部門における規則とみなす立場を取るものとして Keyser and Roeper (1984), Zobl (1989)がある。

<sup>7</sup> ただし、目的語に主題役割(thematic role, -role)は付与できる。一方、主語の位置には主題役割を付与することができない (cf. Chomsky (1981: 261; 340; 345, n.5))。したがって、目的語は格のため主語の位置に移動するが、(受動態動詞の場合と同じように) 必要な主題役割は目的語の位置で与えられることになる。

非対格動詞が目的語に格を付与できないとするアイデアに対して、内在格の一つとしての部分格 (partitive Case)を付与できるとする分析も提案されている (cf. Belletti (1988))。この分析に従うと、非対格動詞には、格付与能力が全般的に欠けているのではなく、構造格としての対格を付与する能力だけが欠けていることになる。

<sup>8</sup> 非対格動詞・非能格動詞の意味分析の研究としてほかに、「制御可能性 (controllability)」および「完結性 (telicity)」の意味概念を用いたものとして Zaenen (1993) があり、また、認知文法の観点を取り入れたものとして谷口 (1998) を挙げるができる。

<sup>9</sup> ただし、非対格動詞が there 構文を許すという一般化が当てはまらない場合もあるようである。次の例を参照 (Burzio (1986: 160) より)。

- (i) a. The riot began.
- b. There began a riot.
- (ii) a. The riot started.
- b. \*There started a riot.

非対格動詞と there 構文の関係についてさらに詳しくは、有元 (1991) および高見・久野 (1999) を参照。

<sup>10</sup> 厳密に言うと、そのような立場を表す用語として、Pinker 自身は “continuity hypothesis” ではなく、“continuity assumption” という用語を用いている (cf. Pinker (1984: 7) が、Borer and Wexler (1987: 124) や Hyams (1987: 18, fn.1) などでは、“continuity hypothesis” として紹介されている)。

<sup>11</sup> Grodzinsky (1995) は、下記例文 (ia) のような心理的動詞 (psych verbs) の受動文、および (ib) のように数量詞を含む受動文を幼児が正しく理解できるかどうかを調べた結果、正しく反応できる確率が、それぞれ偶然値以下および偶然値以上であったということを報告している。

- (i) a. The man is loved by the woman.
- b. Every man is pushed by a woman.

<sup>12</sup> ただし、Fox and Grodzinsky (1998: 316-317) は、Pierce (1992b) の中で報告されている実験結果が A-連鎖の習得に対する成熟説を全体的に否定しているかのような印象を与えかねないような紹介の仕方をしている。これは、Pierce が行った二種類の実験 (すなわち、3歳7ヶ月から5歳9ヶ月までの子供18人を対象とした periphrastic passive の理解力テストおよび morphological passive の産出テスト) のうち、特に前者の実験結果の方をより重要視したとらえ方に基づいている。すなわち、前者の実験結果に対するコメントとして Pierce (1992b) は、“the major predictions were not supported” (p. 61), すなわち、“the crucial finding is that children do not find periphrastic

passives with post verbal subjects easier to comprehend” (pp. 64-65)のように述べている。ただし、後者の実験結果は、A-連鎖の成熟説を指示するものとなっている。また、Pierce 自身による論文全体のまとめも、そのような内容のものとなっている。すなわち、結論として Pierce (p. 78)は次のように述べている。“... the empirical results discussed here provide suggestive evidence in favor of the theory of A-chain maturation, or .... ”

<sup>13</sup> あるいは、これと部分的に異なる次のような見方もある。すなわち、言語発達上の初期段階の子供達が習得している文法では、機能範疇 (Inflectional Phrase (IP))がまだ存在せず、したがって、名詞句移動により名詞句が移動して行く移動先としての主語の位置、すなわち、IP の指定部 (Specifier, Spec)の位置が確保されていないので、問題の名詞句移動も適用できないとする考え方である。たとえば、Köppe (1994: 212)において紹介されている Guilfoyle and Noonan (1988)の立場がそうである。

<sup>14</sup> これらの動詞は、他動詞としての基底構造を持つが、目的語を消去することにより、自動詞としても用いることのできる種類の動詞であると考えられる (cf. Jespersen (1927: 321ff.), Fraser and Ross (1970), Miller and Fellbaum (1991: 226), Hoekstra and Roberts (1993: 188), Lemmens (1998: 140-146))。一方、Poutsma (1926: 58ff.)によると、これら自動詞用法は、他動詞用法の目的語が動詞に吸収される (absorption of the object) ことにより得られる用法であるということになる。なお、このような動詞は、「疑似他動詞 (pseudo-transitive verbs)」と呼ばれることがある (cf. Declerck (1991: 33), Rutherford (1997: 193))。

このような目的語の消去が見られるのは、Givon (1993: 78)が指摘するように、目的語の表すものが、一般的なもの、予測可能なもの、あるいは、慣習化されたものの場合である (次の例(Givon (1993: 78)より)を参照)。

- (i) a. Mary ate (in a hurry).
- b. John drinks (heavily).
- c. Mary teaches (for a living).

なお、これらの動詞が語彙目録の中で、自動詞用法と他動使用法それぞれ別々の語彙項目として記載されているとすべきかどうかの問題については、Miller and Fellbaum (1991: 226), Aarts (1995: 85)を参照。

<sup>15</sup> 非対格動詞が、他動詞用法を併せ持つ (すなわち、使役化が可能) かどうかの区別がどのような要因と結び付いているかについての分析については、様々なものがある。たとえば、そのような分析のひとつとして、Levin and Rappaport Hovav (1995: ch.3)は、問題になっている動詞が、外在的な力によって引き起こされるできごと (externally caused eventuality) を表すことができる動詞であるか、それとも、内在的な力によって引き起こされるできごと (internally caused eventuality) だけを表す動詞であるかの違いが重要な要因となっていると述べている (ほかの分析の例としては、Smith (1970), Pinker (1989: 130-134)を参照)。

<sup>16</sup> (15a) のような動詞についてのさらに詳しいリストについては、Fiengo (1980: 55), Levin (1993: 25-33)を参照。

<sup>17</sup> 同じような使役化の過剰一般化のほかの例として、Allen and Crago (1993: 19)は次のような例を Bowerman (1982)から引用している。

- (i) a. I wanta *swim* that.
- b. Do you want to come watch the mans *sing* their guitars?
- c. *Drink* me.

(Radford (1997a: 420; 1997b: 220-221)にも、Bowerman (1995)による類似の例文が紹介されている。)

<sup>18</sup> 使役化が可能かどうか、自動詞を非対格動詞と非能格動詞に分類するときの重要な手掛かりのひとつになるということについては、Rosen (1984), Burzio (1986), Levin and Rappaport Hovav (1995)を参照。一方、非能格動詞が一般的に使役化を許さないことを示す例としては、下記のようなものがある(cf. Levin and Rappaport Hovav (1995: 80))。

- (i) a. The children played.
- b. \*The teacher played the children.  
      (cf. The teacher made the children play.)
- (ii) a. The actor spoke.
- b. \*The director spoke the actor.  
      (cf. The director made the actor speak.)
- (iii) a. The crowd laughed.
- b. \*The comedian laughed the crowd.  
      (cf. The comedian made the crowd laugh.)

<sup>19</sup> ただし、使役化のときに加えられる外項の持つ主題役割としては、行為者のほかに、次の例に見るように(Levin and Rappaport Hovav (1995: 84))、「道具(instruments)」としての主題役割、および「自然の力(natural forces)」と呼ぶべきものがあるが、ここでは、それらのものをも含めた広い意味での「行為者」という概念を用いている。

- (i) a. *The rock* broke the window. [instrument]
- b. *The earthquake* broke the window. [natural force]

<sup>20</sup> 自動詞用法と他動詞用法を併せ持つような非対格動詞の分析については、ここで示したように、使役化のプロセスにより自動詞用法から他動詞用法を導く分析のほかに、その逆に、他動詞用法をむしろ基本と考え、それを自動詞化する(detransitivize, anticausativize) ことにより、自動詞用法を導く分析がある(たとえば、Chierchia (1989), Miller (1993: ch.7), Levin and Rappaport Hovav (1995)など(なお、このような分析に対する批判としては、Chomsky (1965: 189; 214, n.15), Chomsky (1970: 221, n.40) がある)。ただし、Chierchia (1989)の場合は、すべての非対格動詞について、この後者の分析を当て嵌めようとする(cf. Levin and Rappaport Hovav (1995: 82)) のに対して、Levin and Rappaport Hovav (1995) の場合は、ある特定の条件のもとでだけ自動詞化が起こると主張する(詳しくは、Levin and Rappaport Hovav (1995: ch.3) を参照)。

自動詞化が起こらない他動詞を、その意味的特徴の上から分類すると次のようになる。(1) ある方向への動きを引き起こすことを表す動詞、(2) 「殺す」「創造する」「破壊する」の意味を表わす動詞、および、(3) ある動作を誘発することを表す動詞(それぞれ、下記の例文(i)-(iii)を参照。なお、上記の分類および例文は、ともに Pinker

(1989: 132)より )

- (i) I took my son to school./\*My son took to school.  
I brought my sister home./\*My sister brought home.  
I raised the flag./\*The flag raised.
- (ii) Catherine killed Bobby./\*Bobby killed [= died].  
(Also *slay, murder, dispatch, liquidate, assassinate, slaughter, exterminate, waste, do in*, etc.; see Talmy, 1985)  
They created a monster./\*A monster created.
- (iii) Jack tickled Sally./\*Sally tickled.  
(Also *amuse, nauseate, feed, bribe, convince*, etc.)

<sup>21</sup> このことから、子供は言語習得の初期の段階では、無標の生成過程よりも有標の生成過程のほうを選ぶ(すなわち、経済性の原理に反する生成過程を選択すること)がある、というようなことを Borer and Wexler (1987)が主張しているように思えるかもしれないが、そうではないであろう。たとえ、大人にとっては、A 連鎖を取り入れた分析のほうが、粗うでない分析と比べ、より無標の生成過程を作り出すことが認識できるとしても、発達段階のある程度以降の時期になるまで A 連鎖の知識が利用できない子供にとっては、A 連鎖によらない有標の生成過程こそが、その時点で考慮の対象になるもっとも無標のものだと判断されるので、結果的にその有標の生成過程を選ばざるを得ないことになる。

英語において、使役化の過剰一般化の現象が非能格動詞にも見られることを示す Bowerman (1982)のデータ(例文(17a-c)に相当)により、A 連鎖についての成熟性の仮説を正当化できるとする Borer and Wexler (1987)の主張について、Allen and Crago (1993: 19)は次のような問題点を指摘している。

- (i) [ Bowerman (1982)の提示するデータの中で ] 使役化の過剰一般化が非能格動詞について見られる割合は、[ ほかの動詞の場合を含めた全体の ] 20%に満たない。
- (ii) 非能格動詞以外の動詞について、使役化の過剰一般化がなぜ起こらなくなるのか、成熟性仮説では説明できない。
- (iii) 使役化の過剰一般化の現象が、どうしてU型の出現状態を呈するのか[すなわち、どうしてU型の学習曲線となって表れるのか]、成熟性仮説では説明できない。(A 連鎖の知識が成熟する前の段階においては、U型の出現状態ではなく、むしろ、[時間軸に沿って]一定した現れ方を示すことが期待されるはずである。)
- (iv) 第二言語学習者の場合も、非能格動詞について、使役化の過剰一般化の現象が見られる。

<sup>22</sup> Zobl (1989)の被験者は、カナダおよびアメリカにおいて ESL (English as a Second Language) のためのプログラムに参加した、大学生に相当する年齢の 114 名の英語学習者で、その内訳を母語の違いによって示すと次のようになる。すなわち、日本語 (90)、アラビア語 (10)、スペイン語 (10)、中国語 (1)、トルコ語 (1)、タイ語 (1)、インドネシア語 (1)。なお、ここで問題にしているデータは、これらの被験者が書いた英語作文に基づいている。

<sup>23</sup> 同じよう誤りの例として、Rutherford (1997: 182)の挙げている次のような例を参

照。

- (i) a. \*After a week patient will *be died*. [ Japanese ]
- b. \*I *was nearly arrived* to my office. [ Italian ]
- c. \*The leaves *were fallen down*. [ Chinese ]
- d. \*Nobody would tell her what *was happened*. [ Spanish ]
- e. \*The cultural uniqueness *is now disappeared*. [ Korean ]

なお、Oshita (1997: 133-135)は、同じような誤りの例を取り上げている L2 習得研究の中で、もっと早い時期のもの例として Burt and Kiparsky (1997: 47)(下記の例(ii)を参照)および Richards (1973: appendix) (下記の例(iii)を参照)があることを指摘している。

- (ii) a. \*I hope that the good will between U.S.A. and Republic of Korea will *be lasted* long time.
- b. \*Some people afraid that if the war ends a financial crisis will *be arisen*.
- c. \*He *was arrived* early.
- (iii) a. \*He *was died* last year.
- b. \*One day it *was happened*.

<sup>24</sup> ただし、このような誤りを、ここで述べたような「受け身規則適用の過剰一般化」と呼ぶのは誤解を招くおそれがある。すなわち、「受け身規則」というような、ある特定の構文に特有な変形規則は、GB 理論以降、すべて「移動」という一般的なひとつの規則にまとめられるようになったといった理論的変遷はともかく、たとえ従来の文法理論の枠組に基づいた説明を試みる場合でも、D 構造の段階で受動形態素 *be+en* がすでに選択されているとする分析を取り入れた文法理論の枠組を想定するのが、今では普通となっているからである。すなわち、そのような文法理論を考えた場合、「受け身規則」、すなわち、名詞句移動(あるいは 移動)の適用を受けたからといって、非対格動詞が受動形態の動詞に変わるという変化が同時に生じることが意味するわけではないからである。

<sup>25</sup> Kitagawa (1995: 227)は受け身文の特徴のひとつとして、「非対格動詞および引上げ動詞とは両立しない」を挙げている。

<sup>26</sup> 例文 (21a-b)は Balcom (1997: 6)からの引用である。Balcom は、中国語を母語とする 38 人の英語学習者の大学生(TOEFL 得点の平均値 578.9)を対象として文法性判断テスト(grammarality judgement task)を試みている。例文(21a-b) は、その実験の中で被験者に提示された非文のうち、被験者が文法的文であると誤って判断する割合が比較的高いものの例である。一方、例文 (21c)は Hirakawa (1995: 295) が Yip (1989)からの引用として挙げているものである。

<sup>27</sup> 非対格動詞を含む次のような文も、英語学習者、少なくとも日本人英語学習者にとって、みずからが正しく発話したり書いたりするのに困難を感じるおそれのある文の例となり得るであろう。

- (i) a. Trains were suspended for more than an hour between Yoyogi and Meguro stations Thursday night when electric power failure blacked out a section of the Japanese National Railways Yamanote Line. [ ... ] Long lines of people *formed* at taxi stand in front of each station.

- b. In February last year, the mother *tested* positively for AIDS and was advised not to become pregnant, according to the officials.  
(*The Daily Yomiuri*, Aug. 19, 1987, p.8)
- c. Much of her analysis would *translate* rather straightforwardly into our approach.  
(*Language* 63 (1987), p. 220, fn. 2)
- d. Spending too much time on the Internet has cost a woman custody of her children.  
[ ... ] Witnesses testified that after the couple *separated*, Mrs. Albridge moved the computer into her bedroom, put a lock on the door and began spending most of her time online.  
(*The Daily Yomiuri*, Oct. 28, 1997, p.8)
- e. If we wish to preserve our planet, our lifestyles must *change* dramatically.  
(From *The Economist*; *The Daily Yomiuri*, Nov. 4, 1997, p.13)

(ここで非対格動詞として示してあるものの中には、厳密に言うと、中間動詞として別扱いをすべきものが含まれている可能性があるが、ここでは、両者の厳密な違いについては触れないで置く。英語の中間動詞については、Fiengo (1980: 49-58), O'Grady (1980), Keyser and Roeper (1984), Roberts (1986), Hale and Keyser (1987), Massam (1988), Fagan (1988, 1992), Hoekstra and Roberts (1993), 大庭(1993), 時崎(1998), Yoshimura (1998)を参照。このうち特に Hale and Keyser (1987)は、非対格動詞と中間動詞の違いを統語的なものとは考えず、語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure, LCS)の違いによるものとみなすのに対し、Massam (1988)は、両者の違いを統語的なものとみなしている。なお、英語の中間動詞の第二言語習得研究の例については、Hirakawa (1995)を参照。)

みずからが英語学習者のひとりである筆者の直感からすると、これらの例文 (ia-e) において表現されている意味内容を、(ia-e)のような対格構文ではなく、受け身構文を用いて表現しようとする英語学習者がいるであろうことが十分想像できる。ただし、少なくとも(ia-e)のような文に対応する受け身文は、いずれも非文あるいは少なくとも不自然な文となることに注意しなければならない。このように、非対格動詞とそれに対応する受け身構文とで意味用法が異なるような場合について、Curme (1931: 441)は次のように述べている。

“ The passive with passive form represents a person or thing as being affected by an agent working under resistance vigorously and consciously to a definite end, while the passive with intransitive form represents an activity as proceeding easily, naturally, often almost spontaneously. ”

上記例文 (ia-e)と同じように、日本人英語学習者が、みずから正しく発話したり書いたりするのに困難を感ずるおそれのあるような文の例として、さらに次のようなものがある。

- (ii) a. Football games often *sell out* well in advance.  
(*Collins Cobuild English Dictionary*, 2nd ed., s.v. *sell*)
- b. Japan *ranked* fourth among 10 major developed countries in terms of politics to reduce global warming, according to a report compiled by the Worldwatch Institute, a Washington-based think tank. (*The Daily Yomiuri*, Dec. 1, 1997, p.2)
- c. I promise you'll *hang* for this, traitor!

ただし、これらの文は、受け身構文を用いても同じ内容を表すことができる種類の文である (同じような例については、Curme (1931: 440)を参照)。

また、次のように、対応する受け身文の文法性に対する反応が、インフォーマントにより異なるような非対格構文の例もある。

- (iii) a. One question that inevitably arises is how Emily *compares* in language development with other children of her age.  
(Katherine Nelson (ed.), *Narratives from the Crib*, p. 7. Cambridge: Mass., Harvard University Press, 1989)
- b. Does the new law *relate* only to theft?  
(*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 4th ed., s.v. *relate*)
- c. Simmer until mixture *reduces*.  
(*Collins Cobuild English Dictionary*, 2nd ed., s.v. *reduce*)
- c. One type can be used 'both ways round'. "The boy was chased by the girl" can 'reverse' into "The girl was chased by the boy".  
(David Crystal, *Listen to Your Child*, p. 162. Penguin Books, 1986)

以上の観察からも分かるように、非対格動詞は、それぞれの語彙項目によって、また、たとえ同じひとつの語彙項目の場合でも、表現しようとする具体的意味内容に応じて、非対格構文と受け身構文がともに許される場合もあれば、非対格構文しか許されない場合もある。特に後者の場合は、上に述べたような事情から、英語学習者の書く文あるいは話す文が非文となって表れる可能性が大きい。第二言語としての英語の学習および英語教育のしかるべき場面において、非対格構文と受け身構文との微妙な違いに関する言語知識の的確な習得および教授が要求されるゆえんである。

<sup>28</sup> ただし、(18e)の場合は、用いられている動詞 *dry* が使役化を許す動詞のひとつなので、これを文法的文に導くもうひとつ別の方法がある。すなわち、この動詞に使役化の変化を加え、その結果他動詞となった *dry* により、目的語 *my clothes* に格を付与することができるので、(意図している意味内容からは多少はずれるところがあるが)とにかく、文法的文を生成することはできる。すなわち、文法的表層文に結び付けるということだけを考えるのであれば、目的語をもとの位置においたまま、たとえば、行為者としての主語 *I* を補って、“... until I dried my clothes” のような文法的文を生成することはできる。

<sup>29</sup> イタリア語では、下記の例文 (ia),(iia),(iiaa) にそれぞれ対応する (ib),(iib),(iiaa) のような、主語が動詞の後ろに位置するような文も文法的文となる (cf. Burzio (1986: 21))。

- (i) a. *Molti esperti arriveranno.*  
Many experts will arrive.
- b. *Arriveranno molti esperti.*  
Will arrive many experts
- (ii) a. *Molti esperti telefoneranno.*  
Many experts will telephone.
- b. *Telefoneranno molti esperti.*  
Will telephone many experts  
Many experts will telephone.
- (iii) a. *Molti esperti esamineranno il caso.*  
Many experts will examine the case.
- b. *Esamineranno il caso molti esperti.*  
will examine the case many experts  
Many experts will examine the case.

<sup>30</sup> ただし *be*, *stand*, *lie* などのように位置や姿勢を表す動詞の場合、あるいは

come, go, fall などのように、運動を表す動詞の場合には、次の例文(Emonds (1976: 29, 37)に示すように、文頭の位置に前置された副詞的表現の後に V NP の構文が続くような文は文法的な文となる。

- (i) a. In came John!
- b. Down the street rolled the baby carriage!
- c. Round and round spins the fateful wheel!
- (ii) a. In each hallway hangs a large poster of Lincoln.
- b. Among the guests sat John and his family.
- c. Upstairs stands all the wine we bought in Europe.

<sup>3 1</sup> 実験に用いた誤りの文の例として、次のようなものがある。

- (i) Last night I had a very scary experience. We had a couple of big earthquake around 1 a.m., and in my apartment shattered some windows.

<sup>3 2</sup> ただし、誤って非対格動詞として登録されていたとしても、文法的文の表層構造へと結び付ける道が完全に閉ざされるわけではない。たとえば、これらの動詞が、使役化を義務的に受ける非対格動詞であると考えられるかもしれない。もしそうであれば、名詞句移動によって誤って移動してしまった (23a-d) のような非文の主語名詞句は、基底の目的語の位置に留まり、主語の位置には、使役化によって適当な主語名詞句が付加される結果、文法的文が生成されることになる。しかしながら、理論的には可能でも、このような分析は、名詞句移動を伴わない非対格構文を ( there 構文以外にも ) 仮定するという、そもそも非対格仮説の基本的アイデアと矛盾するアド・ホックな分析であると見なされるかもしれない。

<sup>3 3</sup> Schachter and Rutherford (1979)は、“ \*That book has published ” のような誤りが、中国語および日本語を母語とする英語学習者に実際見られることを指摘している (cf. Balcom (1997: 7, fn. 7)。ただし、Schachter and Rutherford (1979)および Rutherford (1997: 279-281)は、このような誤りを、中国語や日本語に見られる「話題 — 評言 (topic-comment)」の構造を英語に転移させたために起こる誤りの例とみなしている。そのような分析に従うと、たとえば下記例文(ia)の構造は、(ib)のようなものであると考えられる(Rutherford (1997: 281))。

- (i) a. \*Most of food which is served in such restaurant have cooked already.
- b. [<sub>TOP</sub> most of food ...restaurant<sub>i</sub>] [<sub>IP</sub> [pro] have cooked [t<sub>i</sub>] already]
- (TOP: Topic; pro: a missing subject)

Yip (1995: ch. 4), Yip and Matthews (1997: 21-23)も、中国人の英語学習者に見られる(ii)のような誤文に対して、同じような分析を提案している。

- (ii) \*New cars must keep inside.

一方、Balcom (1997: 7, fn. 7)は、このような例も、おそらく、非対格動詞に関する過剰一般化の例と考えることができるであろうと述べている。

ところで、Schachter and Rutherford による上記のような捉え方が可能となるのは、次のような事情による。たとえば日本語の場合、「その本は、(すでに)出版しました」のように、話題 - 評言の構造を持った文で、主語が表面に現れないような文が自然な文として存在するので、そのような文が引き金となって、問題の英語の文が誤って作り出されるということは、十分考えられることである。( §5 で取り上げる類似の文(25a) についての同じような解説も参照。) ただし、そのように考えた場合、

"That book has published" のような文については、主語・動詞の一致の現象が、主語（この場合の主語は、空主語ではあるが）ではなく、話題を表す名詞句 (that book) と動詞句 (have published) との間に起こっている（可能性はある）とみなすことになるので、このことについてのしかるべき説明が必要になるであろう（cf. That book, I have/she has/he has/we have/they have published）。

<sup>34</sup> 厳密に言うと、Marantz は、他動詞から自動詞を導く「語彙規則」のことを問題にしている。同じように、Zobl (1989) が問題にしている規則も、統語的規則としての自動詞化の規則ではなく、Keyser and Roeper (1984) が提案している、語彙的規則としての自動詞化（すなわち能格化）の規則である。これは、語彙目録の中において適用される語彙的規則のひとつであり、これにより、他動詞から自動詞すなわち非対格動詞が生成される。Zobl (1989: 217) は、ここで紹介した、過剰一般化に関する言語事実（実際は、彼の観察が間違っているようだが）をもとに、Keyser and Roeper のこの提案を批判している。（Keyser and Roeper のこの能格化の規則に対する批判としてはほかに Napoli (1988) がある。）

<sup>35</sup> このような英語学習者の場合、語彙目録の中に非対格動詞として登録されているすべての非対格動詞に、同じような誤りが見られるのか、それとも、ある特定の語彙に関してだけ、このような誤りが生じるのかが問題となるが、普通は後者のような特徴を呈するようである。詳細については Hirakawa (1995) を参照。

<sup>36</sup> 動詞 lead の場合、他動詞用法が許されないわけではない。「導く・案内する」「(事・人が)(人を)～(の状態に)至らしめる」などの意味としては、他動詞用法が可能である。ただし、このような意味の用法においては、目的語に [+Human] が選ばれるのが普通で、(24b) におけるように [-Human] の名詞句とともに用いるときは、非対格動詞として用いなければならない。なお、動詞 lack の場合は、同じように、他動詞用法は許されるが、受け身にはならないという制限がある。さらに、非対格動詞として用いる場合も、通常、進行形の形で用いなければならないという制限が伴う点で、英語学習者にとって、一般的に完全な習得が遅れる動詞のひとつである。

<sup>37</sup> 第一言語習得の場合、この種の誤りが早い時期の子供の場合には見られない。すなわち、下記(i)のような発話が見られないということを Borer and Wexler (1987: 160) は指摘している。

- (i) a. \*the cake eats
- b. \*the movie sees
- c. \*the doll punished

これは、早い時期の言語習得に見られる次のような特徴と密接に関連する現象であると思われる。すなわち、語彙発達がまだ不十分で、比較的少数の数の語彙しか身に付けていない段階では、それまでに身に付けた規則を拡大して、広い範囲にわたって用いるというような生産的な語彙使用は見られず、いわば保守的な習得状況を呈することが一般的に知られている（cf. Pinker (1989: 283ff.)). この段階を過ぎると、初めて過剰一般化の現象が生ずることになる。

<sup>38</sup> 他動詞の目的語が主格で表されることがあるインドネシアの言語 *Tukang Besi* に

ついで Donohue (1998) の分析を参照。なお、Schachter (1976) は、そのような場合の主格に対して「焦点」「主語」「主題」などの名称を用いて、特にフィリピン諸語の分析を試みている。

<sup>39</sup> 非対格動詞に関する第二言語習得の研究のひとつとして、22人の日本人英語学習者(大学生)を対象に、その習得状況を調査したものと HIRAKAWA (1995) がある。HIRAKAWA (1995) は、(部分)作文テストおよび文法性判断テストを用いて、下記(i)のような5つのタイプに分類される動詞(合計30)の習得の状況をそれぞれ調べている。

(i) Type 1: *melt, break, continue, dry, spill, increase*  
(使役化を許す非対格動詞)

Type 2: *appear, die, fall, arrive, happen, disappear*  
(使役化を許さない非対格動詞)

Type 3: *sing, cry, swim, sleep, dance, smile* (非能格動詞)

Type 4: *hit, cut, see, read, build, need* (他動詞)

Type 5: *wash, read, translate, sell, cut, paint* (中間動詞)

その結果、概略次のような結論を引き出している。(1)英語の第二言語学習者が、受け身規則を過剰一般化して非対格動詞に当てはめる傾向があるとするこれまでの研究報告とは異なり、HIRAKAWA の行った実験の作文テストの中では、そのような傾向は全般的には見られない。(2)(作文テストおよび文法性判断テストのいずれにおいても、二、三の動詞については、ある程度の間違いをする被験者が中には見受けられるものの)文法性判断テストの中では、非対格動詞を全般的に正しく理解していることが示された。(3)上記5つのタイプの動詞の中で、その正しい用法を理解するのがもっとも困難だと思われるのは、中間動詞の用法である。

この HIRAKAWA の研究は、今後、非対格動詞(およびそれに関連する種類の動詞)の第二言語習得研究を進める上で、示唆するところが大きい、ひとつ留意しなければならないと思われる点がある。

すなわち、HIRAKAWA は非対格動詞から成る文法的文を文法的文として、被験者が全般的に正しく判断できるということから、非対格構文には名詞句移動が含まれているという知識を被験者も母語話者と同じように習得していると考えられる(p. 300)、したがってまた、このことから非対格仮説を支持できる(p. 299)と述べている。ところで、非対格動詞が D 構造において目的語を有し、その名詞句が名詞句移動によって主語の位置に移動するという内容を持った非対格仮説は、大変興味ある仮説ではあるが、少なくとも現在のところ、経験的仮説のひとつとして提案されているに過ぎない。なるほど、非対格動詞の持つ意味的特徴は、かなりの程度普遍性を持つ特徴であると考えられるが、非対格仮説において提案されている具体的な統語的分析そのものは、普遍的にどの言語にも当てはまるとは必ずしも限らない(cf. Rutherford (1998: 203))。したがって、非対格仮説は、特に次のような観点から、その妥当性を確かめられなければならない。すなわち、統語的規則としての名詞句移動を仮定するのが本当に適切か、あるいは、語彙目録において作用する名詞句移動を仮定するのがよいか、それとも、別の手立てで説明するのが望ましいか、といった観点である(注6参照)。

このように、非対格仮説、特に(統語的規則としての)名詞句移動が関わっているとすると部分については、それを検証するに十分な経験的事実を提示することが、

現在せつに求められている。残念ながら、Hirakawa のように、英語学習者が非対格動詞（の用法）を正しく理解できる、あるいは、非対格動詞と非能格動詞の区別を正しく理解できるということを示すだけでは、非対格動詞に関わる名詞句移動の存在そのものが裏付けられたことにはならないであろう。（なお、Hirakawa が指摘しているような、中間動詞との関連性も、非対格動詞の研究にとっての重要な課題のひとつである。）

<sup>40</sup> Miyagawa (1989)は、非対格動詞の名詞句移動の分析を日本語にそのまま取り入れているが、一方、影山(1983)によると、「日本語では非対格名詞は S 構造でも目的語位置に留まっていることを示唆する現象が様々に観察される」(p.48)ので、名詞句移動は起こらないと見なすことになる。なお、日本語の自動詞・他動詞の間に見られる密接な関連性を意味的、形態的および統語的に分析した研究としては、奥津(1967)、井上(1976: 63-98)およびその他の論文を収録した須賀・早津(1995)が参考になる。

日本語の場合、非対格動詞として用いることができるかどうかの判断には個人差が見られるようである。たとえば、下記の例は、動詞「発射する」「改善する」「改訂する」および「バージョンアップする」「開幕する」「蓄積する」が非対格動詞として用いられている例であるが、

- (i) a. 調べでは、福田さんは二十日までの予定で知人の女性（21）と宿泊。十九日午前二時四十分ごろに回転式ピストルを持ち出し、女性の前で四発の実弾を抜き、映画「ディア・ハンター」で知られる「ロシアンルーレット」のように、こめかみに向けて引き金を三回弾いたところ、残っていた一発が発射したという。  
(『読売新聞』夕刊, 5/20/97, p. 19)
- b. 米三大自動車メーカー（ビッグスリー）が生産した乗用車の品質が、急激に改善していることが、自動車業界では権威ある民間調査会社、JD パワー社の調査分析で明らかになった。  
(『読売新聞』, 3/25/94)
- c. 『アクセスガイド、ニフティマネジャー編』が改訂しました。  
NIFTYMANAGER, Ver 4.6 の解説本で 2200 円（税別）です。  
(インターネット「ニフティマネジャー；クロネコ・書籍の宅急便」  
1998 年 7 月)
- d. Mac OS 8 に合わせて Quick Time がバージョンアップしました。  
(吉川有機『MacOS 8 乗り換え完全ガイド』p.14, 東京：ナツメ社,  
1998 年)
- e. エミー賞やトニー賞のほか、91 年の「ヨンカーズ物語」ではピュリッツァー賞を受賞。現在、自伝「書いては書き直し」の続編を執筆中。年末に 31 昨目の「ディナー・パーティー」がロンドンで開幕する予定。  
(『読売新聞』夕刊, 2/13/99, p.12)
- f. アホウドリの体内に高い濃度で PCB が蓄積していることが明らかとなった。(NHK テレビ(Ch. 1):「午後 7 時のニュース」(1999 年 2 月 21 日))

いずれも、筆者には、どこか不自然に思われる用法である。

また、幼児語「抱っこする」は、童謡「ひばりの赤ちゃん」の中では、「ひばりの赤ちゃん今日もまた、かあさんひばりに抱っこして、お歌のお稽古ピーチクピー」のように、非対格動詞として用いられているが、この用法も、筆者のものとは異なる

るものである。

なお、日本語の自動詞・他動詞に関する第一言語習得研究については、Nomura and Shirai (1997)およびそこに取り上げられている関連文献を参照。

## 参考文献

- Aarts, Bas (1995) "Secondary Predicates in English," *The Verb in Contemporary English: Theory and Description*, ed. by Bas Aarts and Charles F. Meyer, 75-101, Cambridge: Cambridge University Press.
- Allen, Shanley E. M. and Martha B. Crago (1993) "The Acquisition of Passives and Unaccusatives in Inuktitut," *McGill Working Papers in Linguistics* 9, 1-29.
- 有元將剛 (1991) 「非対格動詞構文における there 挿入と小節の構造 (1)-(3)」『英語青年』1月号—3月号.
- Babyonyshev, Masha, Ron Fein, Jennifer Ganger, David Pesetsky, Kenneth Wexler, and Sergey Avrutin (1995) "Maturation of A-chains: Evidence from Russian," *Paper presented at the 20th Boston University Conference on Language Development*, Boston.
- Baker, Mark C. (1997) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Balcom, Patricia (1997) "Why Is This Happened? Passive Morphology and Unaccusativity," *Second Language Research* 13, 1-9.
- Belletti, Adriana (1988) "The Case of Unaccusatives," *Linguistic Inquiry* 19, 1-34.
- Beretta, Alan, Carolyn Harford, Janet Patterson, and Maria Pinango (1996) "The Derivation of Postverbal Subjects: Evidence from Agrammatic Aphasia," *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 725-748.
- Bever, Thomas (1970) "The Cognitive Basis for Linguistic Structures," *Cognition and the Development of Language*, ed. by John R. Hayes, 279-362, New York: John Wiley & Sons, Inc.
- Borer, Hagit and Kenneth Wexler (1987) "The Maturation of Syntax," *Parameter Setting*, ed. by Thomas Roeper and Edwin Williams, 123-172, Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.
- Borer, Hagit and Kenneth Wexler (1992) "Bi-unique Relations and the Maturation of Grammatical Principles," *Natural Language and Linguistic Theory* 10, 147-189.
- Bowerman, Melissa (1982) "Evaluating Competing Linguistic Models with Language Acquisition Data: Implications of Developmental Errors with Causative Verbs," *Quaderni di Semantica* 3, 5-66.
- Bowerman, Melissa (1987) "Commentary: Mechanisms of Language Acquisition," *Mechanisms of Language Acquisition*, ed. by Brian MacWhinney, 443-466, Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Braine, M. D. S. (1976) *Children's First Word Combinations*, Monographs of the Society for Research in Child Development, vol. 41.
- Budwig, Nancy (1990) "The Linguistic Marking of Non-Prototypical Agency: An Exploration into Children's Uses of Passives," *Linguistics* 28, 1221-1252.
- Burchfield, Robert W. (ed.) (1996) *The New Fowler's Modern English Usage*, Oxford: Clarendon Press.
- Burt, Marina K. and Carol Kiparsky (1972) *The Gooficon: A Repair Manual for English*, Rowley, MA: Newbury House.
- Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*, Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.
- 千葉修司 (1998) 「非対格構文の第一・第二言語習得」『先端的言語理論の構築とその多角的な実証(2-A)--ヒトの言語を組み立て演算する能力を語彙の意味概念から探る—』(平成9年度 COE 形成基礎研究費研究成果報告(2) (課題番号 08CE1001) ) 173-208.

- Chierchia, G. (1989) "A Semantics for Unaccusatives and Its Syntactic Consequences," ms., Cornell University. of Syntax
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge, MA: The MIT Press.
- Chomsky, Noam (1966) *Topics in the Theory of Generative Grammar*, The Hague: Mouton.
- Chomsky, Noam (1970) "Remarks on Nominalization," *Readings in English Transformational Grammar*, ed. by Roderick Jacobs and Peter Rosenbaum, 184-221, Waltham, MA: Ginn and Company.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, Cambridge, MA: The MIT Press.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, Cambridge, MA: The MIT Press.
- Clahsen, Harald (1992) "Learnability Theory and the Problem of Development in Language Acquisition," *Theoretical Issues in Language Acquisition: Continuity and Change in Development*, ed. by Jurgen Weissenborn, Helen Goodluck, and Thomas Roeper, 53-76, Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Curme, George O. (1931) *Syntax*, Boston: D.C. Heath and Company.
- Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Tokyo: Kaitakusha .
- Demuth, Katherine (1989) "Maturation and the Acquisition of the Sesotho Passive," *Language* 65, 56-80.
- Déprez, Viviane and Amy Pierce (1993) "Negation and Functional Projections in Early Grammar," *Linguistic Inquiry* 24, 25-67.
- de Villiers, Peter A. and Jill G. de Villiers (1978) *Language Acquisition*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- de Villiers, Peter A. and Jill G. de Villiers (1979) *Early Language*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Donohue, Mark (1998) "Transitivity in Tukang Besi," *Studies in Language* 22, 83-111.
- Fagan, Sarah M. B. (1988) "The English Middle," *Linguistic Inquiry* 19, 181-203.
- Fagan, Sarah M. B. (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions: A Study with Special Reference to German*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Fiengo, Robert (1980) *Surface Structure*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Fox, Danny and Yosef Grodzinsky (1998) "Children's Passive: A View from the By-Phrase," *Linguistic Inquiry* 29, 311-332.
- Fox, Danny, Yosef Grodzinsky, and Stephen Crain (1995) "An Experimental Study of Children's Passive," *MIT Working Papers in Linguistics 26: Papers on Language Processing and Acquisition*, ed. by Carson T. Schuze, Jennifer B. Ganger, and Kevin Broihier, 249-264.
- Fraser, Bruce and John R. Ross (1970) "Idioms and Unspecified NP Deletion," *Linguistic Inquiry* 1, 264-265.
- Fraser, Colin, Ursula Bellugi, and Roger Brown (1963) "Control of Grammar in Imitation, Comprehension, and Production," *Journal of Verbal Learning and Verbal Behaviour* 2, 121-135.
- 古田智子 (1998) 「幼児の日本語受動文の理解について」 *LILIUM* 2, 53-72. (金城学院大学大学院英文学会)
- Givon, T. (1993) *English Grammar: A Function-Based Introduction*, Vol. II, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Grewendorf, Günther (1989) *Ergativity in German*, Dordrecht: Foris Publications.
- Grodzinsky, Yosef (1986) "Language Deficits and the Theory of Syntax," *Brain and Language* 27, 135-159.

- Grodzinsky, Yosef (1990) *Theoretical Perspectives on Language Deficits*, Cambridge, MA: The MIT Press.
- Grodzinsky, Yosef (1995) "A Restrictive Theory of Agrammatic Complementation," *Brain and Language* 50, 27-51.
- Grodzinsky, Yosef, A. Pierce, and S. Marakovitz (1991) "Neuropsychological Reasons for a Transformational Derivation of Syntactic Passive," *Natural Language and Linguistic Theory* 9, 431-453.
- Guilfoyle, Eithne and Maire Noonan (1988) "Functional Categories and Language Acquisition," ms., McGill University.
- 萩原裕子 (1992) 「受動文の統語障害と項構造」『英語青年』138.8, 401-404.
- 萩原裕子 (1998) 『脳にいだむ言語学』岩波書店.
- Hale, Kenneth and S. Jay Keyser (1986) "Some Transitivity Alternations in English" (Lexicon Project, Working Papers 7) Cambridge, MA: Center for Cognitive Science, MIT.
- Hale, Kenneth and S. Jay Keyser (1987) "A View from the Middle" (Lexicon Project, Working Papers 10) Cambridge, MA: Center for Cognitive Science, MIT.
- Hale, Kenneth and S. Jay Keyser (1993) "On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations," *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and S. Jay Keyser, 53-109. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Harada, Kazuko I. and Tomoko Furuta (1998) "On the Maturation of A-chains: A View from Japanese Passives," ms., Kinjo Gakuin University.
- Hirakawa, Makiko (1995) "L2 Acquisition of English Unaccusative Constructions," *Proceedings of the 19th Boston University Conference on Language Development* 1, ed. by D. MacLaughlin and S. McEwen, 291-302, Somerville, MA: Cascadilla Press.
- Hoekstra, Tuen (1990) "Markedness and Growth," *Logical Issues in Language Acquisition*, ed. by I. M. Roca, 63-83, Berlin: Foris Publications.
- Hoekstra, Tuen and Ian Roberts (1993) "Middle Constructions in Dutch and English," *Knowledge and Language, Vol. 7: Lexical and Conceptual Structure*, ed. by Eric Reuland and Werner Abraham, 183-220. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse," *Language* 56, 251-299.
- Hyams, Nina (1987) "The Theory of Parameters and Syntactic Development," *Parameter Setting*, ed. by Thomas Roeper and Edwin Williams, 1-22, Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語(下)』東京: 大修館書店.
- Jespersen, Otto (1927) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part III, Heidelberg: Carl Winters Universitätsbuchhandlung.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京: ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』東京: くろしお出版.
- 梶田 優 (1974) 「変形文法」『文法論 II』(英語学大系 第4巻)東京: 大修館書店.
- Keyser, S. Jay and Thomas Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.
- 北爪佐知子 (1992) 「中間動詞の歴史的考察」ms., 近畿大学.
- 北爪佐知子 (1993) 「中間動詞の意味論的考察」『近畿大学文学部論集』(文学・

- 芸術・文化) 5.2, 219-236.
- Köppe, Regina (1994) "NP-Movement and Subject Raising," *Bilingual First Language Acquisition: French and German Grammatical Development*, ed. by Jürgen M. Meisel, 209-34, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Lemmens, Maarten (1998) *Lexical Perspectives on Transitivity and Ergativity: Causative Constructions in English*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport (1989) "An Approach to Unaccusative Mismatches," *NELS* 19, 314-329.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, Cambridge, MA: The MIT Press.
- Maranz, Alec (1984) *On the Nature of Grammatical Relations*, Cambridge, MA: The MIT Press.
- Maratsos, Michael (1974) "Children Who Get Worse at Understanding the Passive: A Replication of Bever," *Journal of Psycholinguistic Research* 3, 65-74.
- Massam, Diane (1988) "Middle, Tough, and Recipe Context Construction in English," *NELS* 18, Vol. 2, 315-332.
- Miller, D. Gary (1993) *Complex Verb Formation*, Amsterdam; John Benjamins.
- Miller, G. A. and C. Fellbaum (1991) "Semantic Networks of English," *Lexical and Conceptual Semantics*, ed. by Beth Levin and S. Pinker, 197-229, Oxford: Blackwell.
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking in Japanese* (Syntax and Semantics 22), San Diego, CA: Academic Press.
- Moore, Miriam Margaret Phillips (1993) *Second Language Acquisition of Lexically Constrained Transitivity Alternations: Acquisition of the Causative Alternation by Second Language Learners of English*, Doctoral dissertation, University of South Carolina.
- Napoli, D. Jo (1988) "Review of Burzio, *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*," *Language* 64, 130-142.
- 大庭幸男 (1993) 「英語の中間構文について」『英語青年』139.7, 344-346.
- O'Grady, William (1980) "The Derived Intransitive Construction in English," *Lingua* 52, 57-72.
- O'Grady, William (1997) *Syntactic Development*, Chicago: The University of Chicago Press.
- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化—自・他動詞の対応」『国語学』70, 46-66; 須賀一好/ 早津恵美子編『動詞の自他』(日本語研究資料集 [第1期第8巻]) 57-81, 東京: ひつじ書房, 1995.
- Oshita, Hiroyuki (1997) "*The Unaccusative Trap*": *L2 Acquisition of English Intransitive Verbs*, Doctoral dissertation, University of Southern California.
- Perlmutter, David M. (1978) "Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis," *Proceedings of the Fourth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 157-189, Berkeley: University of California.
- Pierce, Amy E. (1992a) *Language Acquisition and Syntactic Theory: A Comparative Analysis of French and English Child Grammars*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Pierce, Amy E. (1992b) "The Acquisition of Passives in Spanish and the Question of A-Chain Maturation," *Language Acquisition* 2, 55-81.

- Pinker, Steven (1984) *Language Learnability and Language Development*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Pinker, Steven (1987) "Resolving A Learnability Paradox in the Acquisition of the Verb Lexicon," (Lexicon Project Working Paper17), Cambridge, MA: Center for Cognitive Science, MIT.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*, Cambridge, MA: The MIT Press.
- Pinker, Steven, David Lebeaux, and Loren Frost (1987) "Productivity and Constraints in the Acquisition of the Passive," *Cognition* 26, 195-267.
- Poutsma, Hendrik (1926) *A Grammar of Late Modern English*, Part II, Section II, Groningen: P. Noordhoff.
- Pullum, Geoffrey K. (1988) "Topic ... Comment: Citation Etiquette Beyond Thunderdome," *Natural Language & Linguistic Theory* 6, 579-588.
- Pye, Clifton and Pedro Quixtan Poz (1988) "Precocious Passives (and Antipassives) in Quiche Mayan," *Papers and Reports on Child Language Development* 27, 71-80.
- Radford, Andrew (1990) *Syntactic Theory and the Acquisition of English Syntax*, Oxford: Basil Blackwell.
- Radford, Andrew (1997a) *Syntactic Theory and the Structure of English: A Minimalist Approach*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Radford, Andrew (1997b) *Syntax: A Minimalist Introduction*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Richards, Jack C. (1973) "A Non-contrastive Approach to Error Analysis," *Focus on the Learner: Pragmatic Perspectives for the Language Teacher*, ed. by John W. Oller, Jr. and Jack C. Richards, 96-113, Rowley, MA: Newbury House.
- Roberts, Ian (1985) *The Representation of Implicit and De-thematized Subjects*, Doctoral dissertation, University of Southern California.
- Roberts, Ian (1997) *Comparative Syntax*, London: Arnold.
- Rosen, Carol (1981) *The Relational Structure of Reflexive Clauses: Evidence from Italian*, Doctoral dissertation, Harvard University. [Published by Garland Publishing, Inc. , New York, in 1988]
- Rosen, Carol (1984) "The Interface between Semantic Roles and Initial Grammatical Relations," *Studies in Relational Grammar* 2, ed. by David M. Perlmutter and Carol Rosen, 38-77, Chicago: The University of Chicago Press.
- Rutherford, William E. (1997) *A Workbook in the Structure of English: Linguistic Principles and Language Acquisition*, Malden, MA: Blackwell Publishers, Inc.
- Schachter, Jacquelyn and William E. Rutherford (1979) "Discourse Function and Language Transfer," *Working Papers on Bilingualism* 19, 1-12.
- Smith, Carlota S. (1970) "Jespersen's 'Move and Change' Class and Causative Verbs in English," *Linguistics and Literary Studies in Honor of Archibald A. Hill, Vol. 2: Descriptive Linguistics*, ed. by M.A. Jazayery, E.C. Polom , and W. Winter, 101-109, The Hague: Mouton.
- Snyder, William, and Karin Stromswold (1997) "The Structure and Acquisition of English Dative Constructions," *Linguistic Inquiry* 28, 281-317.
- Snyder, William, Nina Hyams, and Paola Crisma (1995) "Romance Auxiliary Selection with Reflexive Clitics; Evidence for Early Knowledge of Unaccusativity," *Proceedings of the Twenty-Sixth Annual Child Language Research Forum*, ed. by Eve V. Clark, 127-136, Stanford, CA: CSLI.
- Sorace, Antonella (1993) "Incomplete vs. Divergent representations of Unaccusativity

- in Nonnative Grammars of Italian," *Second Language Research* 9, 22-47.
- Sorace, Antonella (1997) "Acquiring Linking Rules and Argument Structures in a Second Language: The Unaccusative/Unergative Distinction," *The Current State of Interlanguage*, ed. by Lynn Eubank, Larry Selinker, and Michael Sharwood Smith, 153-175, Amsterdam: John Benjamins.
- 須賀一好・早津恵美子編 (1995) 『動詞の自他』(日本語研究資料集 [第1期第8巻]) 東京: ひつじ書房.
- Talmy, Leonard (1985) "Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms," *Language Typology and Syntactic Description, Vol. 3: Grammatical Categories and the Lexicon*, ed. by Timothy Shopen, 57-149, Cambridge: Cambridge University Press.
- 高見健一・久野 (1999) 「There 構文と非対格性 (1)-(3)」『英語青年』1月号—3月号.
- 谷口一美 (1998) 「非対格性考察: その概念的基盤と文法構造との関わり」JELS 15 (日本英語学会第15回大会(東京都立大学)研究発表論文集), 231-240, 日本英語学会.
- 時崎久夫 (1998) 「再帰代名詞と中間態構文」JELS 15 (日本英語学会第15回大会(東京都立大学)研究発表論文集) 241-250, 日本英語学会.
- Van Hout, Angeliek, Janet Randall, and Jurgen Weissenborn (1993) "Acquiring the Unergative-unaccusative Distinction," *The Acquisition of Dutch* (Amsterdam Series in Child Language 1), ed. by M. Verrips and F. Wijnen, 79-120, Amsterdam: University of Amsterdam.
- Van Valin, Robert D., Jr. (1987) "The Unaccusative Hypothesis vs. Lexical Semantics: Syntactic vs. Semantic Approaches to Verb Classification," *NELS* 17, Vol. 2, 641-661.
- Van Valin, Robert D., Jr. (1990) "Semantic Parameters of Split Intransitivity," *Language* 66, 221-260.
- Weinberg, Amy (1987) "Comments on Borer and Wexler," *Parameter Setting*, ed. by Thomas Roeper and Edwin Williams, 173-187, Dordrecht, D. Reidel Publishing Company.
- Williams, Edwin (1981) "Argument Structure and Morphology," *The Linguistic Review* 1, 81-114.
- Wilson, Kenneth G. (1993) *The Columbia Guide to Standard American English*, New York: Columbia University Press.
- Yip, Virginia Choy-Yin (1989) *Aspects of Chinese/English Interlanguage: Syntax, Semantics and Learnability*, Doctoral dissertation, University of Southern California.
- Yip, Virginia Choy-Yin (1995) *Interlanguage and Learnability: From Chinese to English*, Amsterdam: John Benjamins.
- Yip, Virginia Choy-Yin and Stephen Matthews (1997) "I-interlanguage and Typology: The Case of Topic-prominence," *The Current State of Interlanguage*, ed. by Lynn Eubank, Larry Selinker, and Michael Sharwood Smith, 17-30, Amsterdam: John Benjamins.
- Yoshimura, Kimihiro. (1998) "A Qualia Model Approach to the Account of Middles and Some Inchoative Processes," *JELS* 15 (日本英語学会第15回大会(東京都立大学)研究発表論文集), 271-280, 日本英語学会.
- Zaenen, Annie (1993) "Unaccusativity in Dutch: Integrating Syntax and Lexical Semantics," *Semantics and the Lexicon*, ed. by J. Pustejovsky, 129-161,

Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.  
Zobl, Helmut (1989) "Canonical Typological Structures and Ergativity in English L2 Acquisition," *Linguistic Perspectives on Second Language Acquisition*, ed. by Susan M. Gass and Jacquelyn Schachter, 203-21. Cambridge: Cambridge University Press.

---